
神様、理不尽です。日常を返してください。

Kein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様、理不尽です。日常を返してください。

【Nコード】

N2048U

【作者名】

Kein

【あらすじ】

普通の大学生オトヤミノルは異世界に召喚された！勇者になって魔王を倒せば帰れるとか言われて出発し、レベル上げしまくって魔王倒しに来たら、魔王を倒しても戻れない！？過去の勇者達と戦わされたり、王様になったり、主人公チート物語の主人公最強の異世界ファンタジー。主人公は不老不死です。また、時代は百年単位でとぶことがあります。主人公だけじゃなく周りも完全チート

7 / 1 0 戯曲風に文体を大幅変更

7 / 1 1 設定資料作りました。ある程度出てきたら、魔術一覧
を作成したいと思います

設定資料（前書き）

設定資料です。用語等随時更新していくと思います。

設定資料

勇者

聖霊教によって数百年に1度地球より魔王を倒すため召喚される。強力な寵愛を持っている。

魔王

数百年に1度、魔界に住む魔族の誰か1人に与えられる加護。強大な魔力と、魔術の知識を得、魔界を加護の続く限り統治する。また、新たな魔王が選ばれると、加護の力は若干落ちるが、それでも強力。

聖霊教

聖霊を信仰する宗教。地上において広く信仰されている。魔族を人々の敵としている。しかし、最近では、魔族を人類の敵とする教えをよく思わない者達もでている。

大空洞

魔界へつながる大穴。北、中央、南の3つがある

魔術

魔法を体系化した物で、自らの魔力と、詠唱、あるいは魔法陣を用いて、世界を騙し、現象を書き換える術。詠唱を用いる物を、詠唱魔術。魔法陣を用いる物を、構築魔術という。魔法陣を用いる場合、紙などに書かず、専用の魔道具を用いて魔力で書くのが普通。熟練した魔術師なら、魔道具も必要ない。また、詠唱、魔法陣で用いる構文は独自の物を開発できる。独自開発の方が、魔力の効率が高い。また、構文に使える指示語（どんなことをするのかを決める語）は独自の魔法と言ってもいいほど、個人によって違う。生物は皆独自の言語を持っているとされる。これによって人によって使いやすい魔術などが影響していると言われる。また、魔法は、この生物はここに持つ独自の言語によって成り立っているとされ、魔法に似たものがあるのは、言語が比較的にていること、全く独自の魔法は、その言語とは別の言語だから推測されている。また、このため独自の魔法を持っているものはみんなが持っているような魔法を持っていないことがおおい。また、後述している魔術師ギルドの分け方の他に、火・水・風・土・黄・金・雷・光・闇 と言う分け方もある。

魔法

一人一人違う、特殊な術。詠唱も魔法陣も必要が無い物がおおい。

聖霊の寵愛

魔界では加護とも言う。魔法とは違い、魔力を消費しないのが大きな特徴。常時発動する物や、先天的なもの、後天的な物など様々。

地上

人間達が住んでいる世界。聖霊教によって統治されている。

魔界

地下世界。地上より遙かに文明が進んでいる。魔王を中心に政治を行うが、年に1度、主要な魔族の族長があつまり、その年の方針を決定する。

大空洞都市　大空洞に浮いている都市。3つあり、中央をガラテア、北をキズキ、南をシルヴァーナが治めている。遙かに技術が進んでおり、魔界が進んでいるのは、ここの技術提供のおかげ。徹底的な秘密主義で、入った者には、外に一切口外できなくなる呪いがかけられる。

魔道具

魔術的な仕掛けを仕込んである道具。魔晶石を魔力源とする物や、使用者の魔力を使用する物など。魔術が使えなくても、魔力があれば使える。

宝具

ある概念が付与された道具。強大な力を持ち、本来あまり存在しない。全てキズキが作ったものだが、一部、ミノルが使いやすいように改変して作った物などがある。

はつきり言ってまんまF。t e です

傭兵ギルド

本部は北大空洞都市。魔王城城下町と、聖都ラグランジアに魔界本部、地上本部があり、また、各地に支部がある。しかし、実際に北大空洞都市の本部を知っているのは、北大空洞都市に住む者と、ギルドの上層部のごく一部のみ、

傭兵となっているが、実際には、よくある冒険者ギルド。なぜ冒険者と言わないかと言えば、地上ならまだしも、魔界の冒険者というのは、ダンジョンに入って探索して戻ってきたらいつの間にか10年たっていたと言うことも多々あるため、とてもそういう人を使うことができないから。冒険者になろうと思う者が、傭兵ギルドで鍛えてから、冒険に出ることが多い。

ギルドマスターは創設者のキズキの他に2人おり、3人が話し合つて方針や重要事項を決める。

ちなみに残りの2人は、地上代表と、魔界代表である。地上代表は、聖霊教に悟られないようにするので大変らしい。

登録者はランク分けされており、F→A その次にS、SS、SSSと続き、最後にLeg（Legendary）となる。

Legendaryは数がきわめて少なく、5人ほど。ただし、ギルマスに選ばれた中にもおり、ギルマスに選ばれると、このランクの人数からは除外される。ギルマスは、実力、正確などを審査し、3年に1度2人選ばれる。

魔術師ギルド

場所は本部が中央大空洞都市であること以外は傭兵ギルドに同じ。単なる魔術師の集まりというわけではなく、様々な魔術書、研究施設などがそろつて。

登録者は、使用する魔術の系統から、

魔力を使つて、物体を操る（物体の浮遊、風を起こすなど）ものを『力天』

魔力を物質に変換して使う（火を出したり、水を出したりする）ものを『座天』

魔力をそのまま攻撃に使う（魔力波や、魔弾、魔弓など）ものを『主天』

魔力をそのまま支援や防御、その他のことに使う（結界や、身体強化、探知など）『能天』

の4つに分けられる。通常これらのうち、1つが最も得意で、次に2つ得意と言うほどではないがそれなりに使えるものがあり、最後に1つだけ、あまり使えない、あるいは全く使えないものがある。

主天を使えないものがおおい。また、これらのうち2つ以上得意なものがある場合『智天』4つ全て得意な場合は『熾天』とよばれる。またこれらはそれぞれ1～12の位に分けられ、試験によって決められる。通常は最も得意な魔術の強さ、種類を見て、どの系統のどの位か決定される。複雑な魔術であるほど、これら4つを併用することもおおい。また、『智天』『熾天』では、通常とは逆に、得意な系統のうち（得意と言っても若干得手不得手はあり、苦手なものとの差がだいたい4～5なのに対し、得意なもので1～2の差がある）、苦手な方の位に決まる。たとえば、『主天の5』と『力天の6』の場合、『智天の5』と言うことになる。『熾天』の場合も同様である。

位の強さの目安として、魔術師でもない、家庭用の小規模な魔術を使う者達を1～3、一般的な魔術師を4～6、一流と言われる魔術師を7～9、そして、1人で戦況を覆すほどの力を持つ魔術師は10～12に分けられる。特に10以上の位を持つものは『戦略級魔術師』と呼ばれる。

確認されている最高ランクは『熾天の12』で、ミノルとガラテアのみ

設定資料（後書き）

ギルドの説明ながいですね・・・
分からない用語があれば、感想などに書いてくれるとありがたいです。

勇者ステータス

キズキ・クダ 初代勇者

身長 190cm 体重 80kg 気さくで親しみやすい。よくあるおっちゃんみたいな性格。 1000歳前後。黒髪、短髪。美形。

筋力 ■■■■■■■■■■ EX+

耐久 ■■■■■■■■■■ SSS+++

敏捷 ■■■■■■■■□ SS

魔力 ■■■■■■□□□ B+++

幸運 ■■■■□□□□□ D

寵愛

宝具 ■■■■■■■■ EX+

魔法

装備・宝具

武器 「神殺しの槍>ロングヌス<」 「勝利を約束する槍>グングニル<」

防具 なし

宝具

機械人形＞ドールズ＜ ランクA＋ 種別 汎用宝具 レンジ1～∞ キズキが生み出した、人形。主の命令通りに動き、また、主を攻撃できない。 様々な魔術・魔法・概念、武器を内蔵しており特殊な能力を持つ。

勝利を約束する槍＞グングニル＜ ランクA＋＋種別 対人宝具 レンジ1 込められた概念は『必中』投擲すれば必ず対象に当たり、手元に戻ってくる槍。防ぐには運かほぼ同様の概念強度が必要 神殺しの槍＞ロンギヌス＜ ランクA＋＋種別 対人宝具 レンジ1 込められた概念は『貫通』投擲すればあらゆる守りを貫いて直進する。躲されることがあるのが欠点。ほぼ同じ概念強度でも躲せる。

この世には無き法則＞ノールール＜ ランクEX種別 対概念宝具 レンジ1 地球になかったものを完全に無効化する短剣。防ぐには遙かに強力な概念強度が必要。

・
・
・

以下無限に作れるので割愛

寵愛

万物創造 ランクEX＋ あらゆるものを作り出すから

探知 ランクB＋＋＋ 周囲20kmの範囲の生物の数や場所が分かる

身体強化 ランクA＋ 自身のステータスを3段階あげる。
上記のステータスは、それを反映したもの

隠密 ランクA＋＋＋ 周りから気づかれなくなる。ただ

し声を出すと気づかれる

魔法なし

ガラテア・エインズワース 2代目勇者

身長 170cm 体重 50kg 明るい性格で、人をいじるのが好き。自称嘔吐き。 650歳前後 ブロンド。セミロング。

筋力

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ □ □ □

A

耐久

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ □ □ □

A +

敏捷	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	S S S + + +
----	---	----------------------------

魔力
■■■■■■■■■
EX+++

幸運
 ■ ■ ■ ■ ■
 □ □ □ □ □
 C
 +
 +
 +

宝具

魔法

装備・宝具

武器 防具 なし

宝具

なし

寵愛

死神 ランクEX+++ あらゆるものを『終わらせる』ちから。不可避。防ぐには遙かに強力な概念強度が必要だが、そんな者は勇者のもの以外あり得ないため、実質防御不可

身体強化 ランクB++ 自分の身体能力を1段階あげる

探知 ランクA 周囲25kmの範囲の生物の数や場所、行動が分かる

隠密 ランクA+++ 周りから気づかれなくなる。ただし声を出すと気づかれる

詠唱省略 ランクEX 現代の全ての魔術を1語で発動可能

転位 ランクA++ 視界の範囲内で転位できる。単純に長距離移動なら、転位魔法を使う。

魔法

治癒 ランクA+ レンジ1〜1000000 傷を完全に治療する。致命傷でも1時間もあれば回復する。通常の魔術の治癒より遙かに性能が高い

物質化 ランクEX レンジ1〜∞ 魔力を好きな形に
物質化できる。これらを射出することで、物理的にもダメージを与
えられる。防御には、対魔結界と対物結界の両方が必要

神結界 ランクA+++ レンジ 1 対物魔結界。完
全に相手の攻撃をブロックする。

ヤン・ランジェニール 3代目勇者
身長 180cm 体重 70kg 嫌味や皮肉が趣味。冷静。だ
けどいい人^{さっし} 茶髪。短髪。 500歳前後
筋力 ■■■■■■ ■ □ □ SS

耐久 ■■■■■■ ■ □ □ □ A+

敏捷 ■■■■■■ ■ ■ □ SS

魔力 ■■■■■■ ■ □ □ S

幸運 ■■■■■■ □ □ □ □ B+

寵愛

宝具 ■■■■■■ □ □ □ □ B+

魔法

装備・宝具

武器 なし

防具 なし

宝具

なし

寵愛

捕食 ランクEX 対象を、異空間に飛ばす。異空間

間の中では、飛ばした時の状態で保存できる。発動中飛ばし続けられるが、飛ばす量には限界がある。

放出 ランクEX 捕食したものを放つ

探知 ランクB++ 周囲20kmの範囲の生物の数

や場所が分かる

身体強化 ランクA+ 自身のステータスを3段階あげる。

上記のステータスは、それを反映したもの

隠密 ランクA++ 周りから気づかれなくなる。ただ

し声を出すと気づかれる

高速思考 ランクA+ 思考を高速化し、時間が遅くなったか

のように感じられる。

魔法

なし

ミノル・オトヤ 4代目勇者

身長 160cm 体重50kg 礼儀正しい。300歳前後。

黒髪。短髪。

筋力 ■■■■■■ EX+++

耐久 ■■■■■■ EX+++

敏捷 ■■■■■■ EX+++

魔力 ■■■■■■ EX+++

幸運 ■■■■■■ EX+++

宝具

寵愛 ■■■■■■ EX+++

魔法

装備・宝具

武器 天叢雲剣・？

魔弾の銃

防具 アイギスの衣

宝具

天叢雲剣・？ 見た目は小太刀だが、抜けばその刀身は持ち主にしか見えずまた、長さも自由自在で、あらゆるものを切ることができる。

魔弾の銃 白いマスケット銃のような銃。専用の魔法がなければ使えない。魔術をこめ、射出する。このとき様々な補助をつけられる。主に魔術の遠隔操作のための補助具。

アイギスの衣 ロープ。フード付き。色は黒を基調に金などで上品な装飾がされている。ゴモリーのところにいた時、ゴモリーが侍女に作らせ、与えたもの。ミノルによって改変され、宝具となる。あらゆるものを躲すことができる。厳密には躲すのでは無く、攻撃の軌道が逸れるのだが。

寵愛

万物理解 ランクEX+++ あらゆる事象を理解できる。また、相手の筋肉の動きなどから、攻撃を予想できる。

万物改変 ランクEX+++ あらゆるものを改変できる。物理的なものであるかどうかは問わない。

万物複製 ランクEX+++ 1度見たあらゆるものを複製できる。物理的なものであるかは問わない

身体強化 ランクEX+++ 自分の身体能力を最大にする

超運 ランクEX+++ とてつもなく幸運になる。ただし、危機が迫らないと発動しない。

知覚延長 ランクEX+++ 探知の強化版。最大周囲1000kmまで、自らの感覚を延ばし、見たり、聞いたり、感じたりできる

隠密 ランクEX+++ 周りから気づかれない。ただし、相手が探知系の結界などを這っている時はこれだけではばれる。

魔力隠蔽 ランクEX+++ 自分の魔力を隠したり、また、魔術発動の際に魔力を隠すことによって、発動のタイミングを悟られないようにする。また探知系の結界もこれで探知されなくなる

高速思考 ランクEX+++ 時間が遅くなったように感じられる。これと万物理解の併用で、ほぼあらゆる攻撃を回避可能。

超運道 ランクEX+++ 人間が持つ本能的な力のセーブを外し、あり得ない方向に関節を曲げたり、人間にはできない軟体動物のような動きをとれる。ただし、当然これらで傷は負う。しかし、超回復ですぐ再生される

超回復 ランクEX+++ 即死しなければ、ほぼ一瞬で再生する

神性 ランクEX+++ 自分より弱いものなどの戦意を喪失させる

詠唱短縮 ランクEX+++ 神代の魔法すら1語で発動できる

転位 ランクEX+++ 1度行った場所や、聞いた場所に転位できる

・ ・ ・
300年で様々なものを強化（狂化？）してきたため、残りは割愛

魔法

神炎 ランクEX+++ 教主からもらった『癒やしの炎』の魔法改造版。炎からイメージできれば、どんな効果にもなる。たとえば、戦意を奮い立たせたり、相手を情熱的に狂わせたりという精神系から、普段戦闘で使うようなあらゆるものを原子分解するという凶悪なもの、怪我を一瞬で治癒したり、空を飛んだり、暖まったり、冷やしたり、と言ったあまり関係しないものでもとにかくイメージできればその効果になる。

魔弾の射手 ランクEX+++ 魔弾の銃をつかい、目的を達成するために、様々な魔法を放つ魔法。これを発動すると、終了するまで、自分の意識はない。様々な特殊効果を備える。リミッターを外した狂化モードもある。しかし、ぶっちゃけ本当はミノルなら改変して相手の原子の密度を変えれば、それで終わる気もする。ちなみに、これらの行動パターンはミノルが自分で組み込んだAIによるもの。

神雷 ランクEX+++ 光速で発動し、着弾する魔法。未来予知でもない限り回避不可。実際には、剣にしたりとか、槍にしたりとか、用途は様々

法則書き換えランクEX+++ 物理法則や、魔術が発動するプロセスの書き換えなど、様々な法則を書き換える。はつきり言ってしまうと

重力操作 ランクEX+++ そのまんま重力を操る。相手を押し潰したり、自分が浮いたり

操り人形 ランクEX+++ 生物に電気信号を送り、体を自由自在に操る。死体でも可

神代の魔法 各種 ランクEX+++ ゴモリーから教わった神代の魔法が使える。強力な**の**ばつか。 例 ブラックホールとか

・

・

そのほか、様々なものがあるため割愛。基本的に勇者のじゃなければ何でも使えます。見てれば。

シルヴァーナ・プロヴェンツァーレ 5代目勇者
身長 180cm 体重 60kg 明るい性格。結構冷静。無駄なことはしないタイプ。1000歳前後。ストロベリーブロンド。
ロングヘア

筋力 ■ ■ ■ ■ ■ □ □ □ □ □ C+++

耐久		A+
■		
■		
■		
■		
■		
■		
□		
□		
□		

敏捷		B ++ ++
■		
■		
■		
■		
■		
□		
□		
□		
□		

魔力

■■■■■■■■■

SSS++

幸運

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ □ □ □

A

寵愛

宝具		S
■		S
■		+
■		+
■		
■		
■		
■		
□		
□		

魔法

裝備・宝具

武器なし

防具なし

宝具

なし

寵愛

時間操作 ランクEX++ 時間を自由に操る。ある物体を時間に影響されやすく（物体にとっての時間を早める）したり逆に影響されないように（時間を止める）したり、時間自体の流れを止め（世界の時間を止める）たり、過去に戻ったり様々。ただし、未来にはいけない。

探知
ランク B++
周囲 18 km の範囲の生物の数や

場所が分かる

身体強化 ランクC 自身のステータスをあげる。

隠密 ランクA++ 周りから気づかれなくなる。ただし、
相手が注意していればまれに見つかる

高速思考 ランクA+ 思考を高速化し、時間が遅くなったか
のように感じられる。

魔法
なし

勇者ステータス（後書き）

なんという主人公チート。肉体魔改造の結果です。

あ、あと書き忘れましたが、みんな不老不死持ちです

探知・隠密・身体強化は大して珍しくないのでみんな持ってます。

宝具は、キズキが貸すくらいで、自分で持つてるなんてことはほぼありません

プロローグ（前書き）

この作品は作者の趣味によって書かれております。適当に気の向くままに書いているので、その点了承して読んでください。

ブローグ

友人A「おい、オトヤ、麻雀の面子たりねえから、ちょっと入ってくれない」

ミノル「あゝ、今日は見たいテレビあるからパスかな」

友人A「マジかー、まあ、いいや。悪かったな引き留めて」

ミノル「いや、別に気にしないよ、じゃあな」

ミノル「うゝ、今日も疲れる講義ばっかだったなあ。はあ。と、なんだ、あの光？　トラックかな　んかかな。しかし妙に明るいぞ」

僕異世界なんて初めて来たよ。え、勇者、誰それ。あ、僕のこと

光の声「君を異世界に送る羽目になっちゃったよ。まあ、がんばってね、能力はあげるから。何でも理解したり複製したり改変する能力だよ」

ミノル「え！？ え？ 誰、誰よ？ 異世界って何？ ちょ、ちょっと」

光の声「ゴメンねえ、そういうの教えるのタブーなんだ。てことでバイバイ、よき異世界ライフを。あ、魔王のことはどうでもいいよ」

ミノル「う、……………どこだ、ここは」

教主 「おお、勇者様、目覚めましたか。急にお越しいただいて申し訳ない。あなたは魔王を倒さないともう戻れませんよ、地球には」

ミノル「は……………？ え、な、何を言ってるんですか。あなたたちなんでそんな変なコスプレしてるんです？ こ、ここはどこですか？ 日本語通じるから日本ですよね？」

教主 「はて、コスプレとは何ですか？ まあ、ここは聖都ラグランジアと言います。勇者様にとっては異世界、と言うべきでしょうか。あと、勇者様はちゃんとこの世界の言葉を話せておりますよ」

ミノル「うつそ…………… 悪夢だ…………… 何の夢だ、俺は事故って昏睡状態なのか……………」

教主 「まあ、勇者様が驚かれるのも無理はありませんが、これは現実でございます。ちなみに今は聖霊歴1284年4月12日でございます。時間の単位は聞いた話ですが、勇者様の世界と変わらなはずですよ」

ミノル「どうでもいい…………… どうすれば帰れるんですか、僕は？ あと何をすればいいんです？」

教主 「勇者様には魔王を倒してもらいたいです。魔王を倒せば勇者様もこの世界に帰れると聞きます」

ミノル「ま、魔王？ どこに魔王はいるんですか？ あともしかして魔法とかあつちやたりしますか？」

教主「おお、さすがは勇者様。いかにも魔法はあります。魔王は魔界の魔王城にいと聞いております」

ミノル「なぜあなたたちが倒さないんですか？ 軍隊くらいあるでしょう」

教主「私たちは力がなくて倒せないのです。しかし勇者様なら大聖霊の寵愛・・・まあ勇者様しか持っていないの特殊な力を持っています魔王を倒してくれると聞いております」

ミノル「そっぴや、さっきの声も能力とか何とか言ってたな・・・どんな能力なんですか？ それ」

教主「歴代の勇者様一人一人違ったようですが、どの勇者様も不老不死であつたと聞きます」

ミノル「マジかよ・・・分かりました。魔界への行き方を教えてください。明日にでも出発します」

教主「おお、魔界へは大空洞を通っていきます。ここからだ数キロ離れた中央の大空洞から行くのが最も早いかと。今夜はたっぷりと食べて明日に備えてください」

ミノル「味薄！ うゝん、どうにかならんのかな・・・ もつと塩をきかせてほしい・・・」

ミノル「あれ、味が付いてる・・・ これがあの声が言ってた改変？ の力なのか・・・ だしたら応用が結構利きそうだなあ。これは便利かも」

教主「おや、勇者様、どうかなさいましたか？」

ミノル「え、いや、もとの世界ではもうちょっと塩がきいていたので、塩味がほしいなあ、と思っていたら、料理に塩味が付いて驚いたのです」

教主「ほう、それは興味深いすな。生憎こちらでは塩はあまりとれませんので」

ミノル「そうですか・・・ まあ、別に良いです。こうして味も変えられるようですし。それでは今日はこの辺で」

ミノル「おはようございます、教主さん。ちょっと聞きたいことがあるのですが今いいですか」

教主「おお、勇者様、早いですな。何なりとお教えしますよ」

ミノル「ええ、まあ、魔法と、あと……そうそう、聖霊の寵愛？　について聞きたいのです」

教主「どちらも勇者様の世界には無い物でしたな」

ミノル「ええ。なのでどのような物か見てみたいので。それに、僕
の能力は改変だけじゃなく理解や、複製もできるはずなので、どの
くらい使えるのか試しておきたいですしね」

教主「そうですね。ではまず魔法から説明しますな。魔法、とい
うのは正確には魔術と魔法に分けられます。いろいろ表現はあるん
ですが、まあ、これらは、魔力を使って、世界を騙している、とか
無理矢理改変している、と言う物です」

ミノル「へえ、神様をお願いしてる、とかじゃないんですね」

教主「そうですね。ああ、後こちらではあなた方の世界の神？
のことを聖霊と呼んでおります。意味的には違いますが。」

さて、魔術というのは、魔法を形式、体系化し広く一
般人でも使えるようにしたもののことです。こちらでは、生活にも
使われます。あかりをとしたり、洗濯とかですな。魔術はそれぞ
れ属性があり、種類は様々です」

ミノル「属性が、全て分かってる、と言うことではないんですね」

教主 「魔術は、構文に従い、対象や、規模などを決めるのですが、この構文自体を行為の魔術師は自作できましてな、それにより属性は様々なのです。まあ、主なものとしてはやはり冷や水、土などを利用するものも多いのでそれらの属性が多いのには違いありません。後は少し高度なものに治癒魔法とかですか。これらも一般人でも使える物はおおいですが」

ミノル「だいたい分かりました。次は魔法についてお願いできますか」

教主 「ふむ、魔法というのは、さっきも言ったとおり魔術の大元になった物でな。魔力を使うのじゃが、一人一人違うのじゃ。個人特有のもので、効果も様々じゃの。たとえばわしは『癒やしの炎』を使える」

ミノル「ちょっと使ってもらっても良いですか」

教主 「いいじゃろう。ほれ、この日が『癒やしの炎』じゃ、対象を燃やすことなくけがを治癒させる炎じゃよ」

ミノル「へー、こんな構造になってるんですね。なるほど。複製できるのかな、同じ物を思い浮かべれば・・・ お、できた」

教主 「なんと・・・確かに癒やしの炎ですな。これは・・・複製されたのですか」

ミノル「ええ、どうも僕は見た物の構造や仕組みを理解したり、考えただけで改変したり複製したりできるみたいですね。魔法や魔術の場合は・・・魔法陣ですかね・・・これは」

教主 「魔法は詠唱や、魔法陣が必要なのに、見えるわけですか・
・どの構文なのか非常に興味がありますが・・まあ、他人の魔法を使えるには脅威ですな」

ミノル 「それじゃあ、最後に聖霊の寵愛について」

教主 「ああ、それは、個人が持つ特殊な加護のことだな。身体能力があがったり、周りの気配が分かったりするものがある。同じ能力でも強さが違ったり、複数持っていたりするな。これには魔力を使わないので、重宝する物もおおいです。勇者様の能力もこれらの一種で、大聖霊の寵愛と呼ばれております」

ミノル 「へー、教主さんは、どんなのを持っていますか、よろしければ見せてほしいのですが」

教主 「わしは探知などですな。どれ、周囲を探ってみますか・・・何か分かりますか？」

ミノル 「あー。なるほどー、これが。分かりましたよ。たぶん使えると思いますけど。どうも寵愛は所有者の設定を変えられますね」

教主 「それは恐ろしい・・奪わないでくださいね」

ミノル 「ええ、複製してから改変しますよ。と、これで良いかな。寵愛が分かるアイテムとかありますか」

教主 「ああ、それはあの部屋の端にある鏡の前に立ってください。鏡に現れます」

ミノル「どれどれ、ああ、出てきましたね。『不老不死』『万物理解』『万物複製』『万物改変』『探知Lv500』『レベル・・・？これはなんです』」

教主「レベル500ですと！？ ああ、すいません。それはその能力の強さです、最初の4つはおそらく大聖霊の寵愛ですな。レベルがないのは、おそらく強くなりようがないからでしょう」

ミノル「ああ、さつき所有者変えるついでに強さのところいじったからか。寵愛は任意に発動するものだけ？」

教主「いえいえ、自動、と言うか、常時発動するものもあります。勇者様の『不老不死』や簡単な『身体強化』あと、なかなか持つものはおりませんが『幸運』や『詠唱破棄』と言ったものですな」

ミノル「それらは複製できるかは会ってみないと分からんなあ」

教主「それでは、会ってみますか？ 教会騎士に何人がおりますので」

ミノル「いいのか？」

教主「ええ、かまいません。それでは行きましょうか。こちらです」

警備隊詰め所

教会騎士A（以下騎士A）「こ、これは教主様！ どうされましたか」

教主「勇者様がお前の『身体強化』を見たいというのでな」

騎士A「はあ、しかし見ても分からないでしょう」

教主「そこが勇者様の凄いところでな、なんとわしの魔法や、寵愛を自分のものにしたのじゃ」

騎士A「なんと、それで、なにかわかりましたか？ 勇者様」

ミノル「ああ。たぶんこれで良いはずだ。どのくらい力であるのかな。制御が力加減がなれなきゃムズそうだ」

騎士A「ああ、それは後天的に授かったものによく聞くことです。任意に発動するものならまだ良いのですが、常時発動だと、力加減になれるまで大変ですから」

ミノル「やっぱりか。まあ、なれるしかないな。あと目がよくなっ

た気がするけど、これも『身体強化』？」

騎士A「わたし程度ではそうはなりません、強い『身体強化』ならば視力や、聴力なども強化されると聞いたことはあります」

ミノル「それかなあ。うん、じゃあ、これで寵愛も良いかな。そろそろ出発しようと思うよ」

教主「何も武器なしでは心細いでしょう。何か武器で得意なものがありますか」

ミノル「そうですね。剣道やってたので刀・・・そのある片刃剣はありますか」

教主「ありますよ。ではこの宝具 天叢雲剣 をお持ちください」

ミノル「あの、宝具って？」

教主「ああ、それはある概念を宿した強力な魔道具のことです。それは鞘から抜けば持ち主に見えず、長さも自在、またいかなるものも切ることができる魔法や概念が宿されております」

ミノル「そんな貴重なものを持って行って良いのか」

教主「それはもとより4代目勇者様のために作られた宝具ですから」

ミノル「それはどういうことですか」

教主「何でも初代勇者様が、いずれ4人目が来たらこれを渡して

くれ、と、当時の教会に預けたものらしいです」

ミノル「まるで僕が来るのを知ってたみたいだなあ。わかった。それじゃあ、ありがたくもらっておくよ」

教主「外に馬を待たせております。どうか魔王を倒してくださいね」

ミノル「ええ、それで帰れるなら、是非ともそうします」

魔界入り口、中央空洞付近

ミノル「クソ、やっぱりモンスターいんのかよ。まあ、身体能力と天叢雲剣の性能が試せたからいいか馬は死んじまったけど、たぶんこっちのワイバーン複製できるはずだし。実物がないとだめってことはないよな。もうこれ死体だ

し。ワイバーン思い出して、襲わないようにして速度上昇。よし、
いいか。やっぱ手を合わせて目つぶるとやりやすいな。さて、あと
はの大穴から下に降りるだけか」

ああ、もう。やっと帰れるよ。え、帰れない？

—— 聖霊歴1584年 魔王歴2489年 7月28日 魔王城

待合室——

ミノル 「ふー、やっとここまで来たなあ、いろいろあつたけど。まさか300年もかかるとか思わなかった。結局魔族も良いやつばっかだし」

マルティナ 「良いやつばっかじゃないわよ。まあ、人間のイメージからしてみれば相対的にそうなのかもしれないけど」

ミノル 「しかし、魔王城の受付で順番待つてる勇者って、なんじゃそりやって感じたなあ」

マルティナ 「あなたが有名すぎるのよ。たった200年で魔術師グルドも傭兵ギルドもレジエンダリークラスになっちゃって。次期ギルマスの候補だものね」

ミノル 「マルティナほど有名でもないと思うけど。それに僕はレベルまっくすにしてからラスボスに挑むくらい慎重なんだよ」

マルティナ 「よくたえが分からないけど、あなたが臆病ってことは分かったわ」

受付 「ミノル・オトヤ様、ミノル・オトヤ様」

ミノル 「あ、はい。今行きます」

マルティナ 「やっとな。さっきから視線も痛いしさっさと行きましようか」

魔王城、執務室

フローザ 「待ちくたびれたわ。お主はわたしの夫になるという仕事をほっぽり出して、今まで何をしておったのじゃ・・・見られてないで、どうにか弁解せんか」

ミノル 「ええ、どういうことだよ、それ」

フロ・ザ 「いいかの、お主はわたしを倒してももとの世界には帰れない。だからわたしの夫になるのじゃ。それとも人狼は好かぬか？ああ、まだ名乗ってなかったな、夫よ。わたしは4代目魔王フローザ・ヴィトニルハイトじゃ。見ての通り人狼じゃよ。まあ、なぜ帰れないかとか、その他の詳しいことはシルヴァーナにでも話してもらおう。そこにいるんじゃないだろう。さっさと出てきて説明せんか」

シルヴァーナ「せかさずともでるわよ。お会いできて光栄ですわ。
マルティナ・ティアマト・ワルプルギス。魔界一とも言われるあなたに会えて。あなたは吸血妖魔にしては珍しく特定の吸血対象パートナーを持たないと思ってたけど、違ったのかしら」

マルティナ「吸血というのは強いやつからやるから意味があるのよ。ザコからやったらつまずいし何の効果もない。今まで持てなかったのはそういう理由よ。まあ、もち朗ミノルを選んだのはそれだけじゃないけどね。魔王さん」

フローザ「ええい、ミノルはわたしのもんじゃとっておるうに」

シルヴァーナ「はいはい、説明の邪魔しないで。さつきもフローザが言ってたけど、あなたは倒しても帰れないわ。体験済みなもの。まだ自己紹介してなかったわね。わたしは5代目勇者シルヴァーナ・プロヴェンツァーレ。イタリア人。能力は『時間操作』。未来からきたのよ。危うく死ぬところだったわ」

ミノル「イタリア・・・？ それは地球のヨーロッパにある長靴のような形をしているあのイタリアか？」

シルヴァーナ「ええ、そのイタリア。今から200年後に召喚されて、100年くらいで魔王を倒したわ。だけど、魔王の魔力が暴走爆発してね。結界なんかぶち破って大けが、体はバラバラになるし、なんと再生したけど、結局戻れなかったし、過去に戻っているいろいろやってもだめだったし、わあたしが召喚される前にあの国を滅ぼしたけど、焼け野原に私が勝手に現れるし、そうしようもないから、初代の時間まで戻って、国興して、今に至るのよ。魔王達とは友好関係。勇者はみんな生きてるし、ほぼみんな魔王と結婚してんのよ。

あなたも私たちのところに来なさい。わたしが召喚されるまではどうしようもないけど、最近の聖霊教は魔族が敵ではないと思ってる奴もいるし、聖霊教も変えられるでしょう。私たちが終わりにしないかね。勇者なんて」

ミノル 「それって選択権ねえなあ。はあ、いいよ。行く。どうせ君たちの国ってアレだろ？ 大空洞に浮いてるやつだろ」

シルヴァーナ「あら、知ってたの。周りから見えないように宝具まで使ってるのに」

ミノル 「理解できるからな。そこに何かあって隠してるってのが分かるんだよ」

シルヴァーナ「へえ、便利ね。まあ、自己紹介は向こうで顔合わせの時が良いわよ。まあ、有名だからあまり必要ないけど、勇者としての力とかは必要ね。それから、マルティナ、あなたも付いてくるのかしら」

マルティナ 「ええ、そうさせてもらうわ。そちらがいいならね」

シルヴァーナ「ええ、別にかまわないわよ、むしろ歓迎」

フローザ 「おい、わたしはどうなるのじゃ」

シルヴァーナ「あなたにはまだ100年くらい魔王としての義務があるでしょ。終わってから来なさい」

ミノル 「僕はいつて何をすれば良い」

シルヴァーナ「そうね。まず自己紹介でしょ。それからギルドと何か新しい事業を考えて創設してもらうことになると思う。まあ詳しくは私たちのまとめ役から聞いて。それからフローザのことはどうでもいいわよ、結婚してもしなくても、まあ、みんな結婚してるけど。わたしと、二人とも男だった初代以外は」

ミノル 「はあ、これから疲れそうだ。第一結婚とか・・・胃が痛くなる」

マルティナ 「持てる男はつらいねえ」

ミノル 「茶化さないでください」

シルヴァーナ「おや、マルティナの他にもいるんですか」

ミノル 「・・・正確には”いた”んだよ。2000年以上も前の話だが」

シルヴァーナ「失礼、失言でした」

ミノル 「別に・・・もうすぎたことだよ。まあ、詳しいことは話したくないけど、そういうわけで結婚するのは気が進まないんだ」

シルヴァーナ「別にかまいませんよ。フローザがもしかしたらうるさいかもしれませんが。では、行きますか」

なんか、俺泣けてきた。やっぱり同郷の人って最高だね

—— 聖霊歴1584年 魔王歴2489年 7月16日 大空洞
都市アルテミス、議事堂『大樹』上層 ——

ミノル 「ここまで凄いとは・・・現代でもこうはいかないだろ」

シルヴァーナ「わたしはあなたたちより未来からこっちに来てるから、そこまでないけど、そうね、自然との調和という意味ではこちらの方が上かしら。魔法がつかえる分機械にしなくても良いからね」

ミノル 「シルヴァーナのいた時代はもつと進んでいるのか」

シルヴァーナ「わたしはだいたい西暦2400くらいから来たからね。普通に宇宙進出して火星とかに住んでるのよ。ちなみに私は月生まれ。月から見る地球ってきれいよ」

ミノル 「僕は2000年くらいからだし、400年でそんな変わるんだなあ。そしてこのエレベーターはどこまで上がるんだい？ さつき100階を超えたような気がしたが」

シルヴァーナ「気のせいじゃないわよ。まあ、まずは個室よ220階がマルティナ、221階がミノルの部屋ね。あ、それとここでは機械人形がいるから、必要なら彼に言つて。初代が作った人形よ。疑似人格を持つてるし、いろいろな能力も持つてるから人間と変わらないわ。この施設の人形達は、一つの疑似人格で統制されてるけど。エレベーターや受付、召使や警備員もね。それと町にあふれる

全ての情報や、住民の感情を調べて、不穏分子が紛れ込んでいないかもチェックされてるわよ」

ミノル 「重力と斥力が釣り合ってるからこの町が浮いてるのは分かるけど、まさか自動車はおるか光学迷彩や転位装置まであるなんて」

シルヴァーナ 「自動車じゃなく機獣だけどね、こっちでは。それに、それだけじゃないわよ、天候操作とかもあるんだから」

ミノル 「とても僕の時代では考えられないな」

合成音声 「220階です」

マルティナ 「ついたみたいね」

シルヴァーナ 「迷いようがないから大丈夫よ、適当に荷物おいときなさい。ああ、それと魔王達が会いたがってたから、そっちの相手をしてもらうかも」

マルティナ 「ええ、そうするわ。久しぶりに顔も見たいしね」

ミノル 「じゃあ、またあとでな」

マルティナ 「ええ」

シルヴァーナ 「じゃ、次はあなたね」

合成音声 「221階です」

ミノル 「うわあ、こんな広いフロアなのに廊下にドアが一つしかない。こりゃ迷わないわけだ。1フロア全部個室とか、どっただけ広いんだよ」

シルヴァーナ「置いてきたようね。それじゃあ、今から顔合わせよ」

ガラテア 「そう、どうぞ、座って。わたしは2代目勇者、ガラテア・エインズワース。イギリス人ね。あ、イギリスで通じますよね？ シルヴァーナの時代はもうイギリスとかなかったらしいですから」

ミノル 「2000年ではまだありましたよ、大丈夫です」

ガラテア 「そう、なら続けるわ。だいたいこつちに来て600、700年てところかしら。数えるのは辞めちゃったから。私たちが化け物たる所以、その能力は死を与えること、生命に限らず、あらゆる物はいずれは壊れる。壊れるよう定められてるの。それを発動させるのがわたしの力。ただ、勇者同士では効かないようよ。わたしはおそらく勇者の持つ能力不死の能力と同格と見なされ、相殺されるからだと思ってるけど。他の勇者の能力にも同じことはいえるわ。」

現在魔術師ギルド、創設者兼ギルドマスター、それと全世界の銀行の総支配人、そして私たちのまとめ役になってるわよ、それからあとであなたの力がどの程度か見せてもらうから、よろしく」

ミノル 「化け物って言い切っちゃうんですね。あと、お手合わせは遠慮したいかな・・・？」

ガラテア 「だめよ。じゃあ、次は、キズキかしら」

キズキ 「オーケー。よう、同郷の。日本人だろ、お前。俺はキズキ・クダ。初代だ。1000年くらい前かな、こつち来たのは。」

能力は、まあ宝具とかを作る力だな。お前の天叢雲剣は俺の初期の作品でも自信作だが・・・どうやらお前はいろいろといじったら

しいな。

あ、それから後からある試験みたいなもんは勇者全員と戦うから、覚悟しとけ。

それと、俺傭兵ギルドの創設者兼ギルマスでチューブ商会の会長やつてるから。お前は優秀だったよ」

ミノル 「あなたも日本人ですか。いやあ、しかし1000年も前というと戦国時代ですか。ギルドとかやってて疲れないんですか？」

キズキ 「戦にくらべりや、全然楽だよ。しかし、御前達の戦争の方が楽だろ。何せ牡丹1つで終わらせられるらしいじゃないか」

ミノル 「まあ、そりやそうですね。後半の方は聞こえなかったことにします」

ヤン 「次はわたしかな、ヤン・ランジェニールという3代目だ。たぶん500年くらい前だったと思うよ、こっちに来たのは。ドイツ人だ。

能力は・・・なんと説明すれば良いかな、生物じゃ無い物なら、何でもためておけるんだ、わたしは。そして自由に引き出せる。もちろんためればそこにあつた物はなくなるよ。これは攻撃にも防御にも使える便利な能力さ。ただ、一度に多くをためれるわけじゃない。分割すればいくらでもためれるけどな。ぼくはこれを食べる、と表現するのがぴったりだと思うんだ。

公認盗賊ギルド、創設者でギルマスをしている。ミネルバ造船の代表でもあるな」

キズキ 「毒舌な上、嫌味ばっかだから気をつける。なれれ

ば良いやつだよ。こんなのも」

ヤン 「こんなのは失礼だな。まあ事実だが」

ミノル 「そこは認めるんですね・・・」

シルヴァーナ「では、最後にわたしね。5代目勇者シルヴァーナ・プロヴェンツァーレ、あなたたちの時代ではイタリアってところ出身だった。まだ、この時間のわたしはこっちに来てないけどね。1000歳くらいよ。特にギルドや商会は受け持っていないわ。能力は知っての通り時間操作。あなたも自己紹介しなさい」

ミノル 「・・・ミノル・オトヤ。4代目です。能力はあらゆる物を理解して、改変したり、複製したりすることができる力です。まだ300歳程度ですが末永くよろしくお願いします」

キズキ 「末永く・・・か、こりゃ良い、こちらこそよろしく」

ガラテア 「ええ、末永くお願いするわ」

ヤン 「まだまだこれからだぞ、新人」

シルヴァーナ「ええ、こき使つてあげるわ」

ミノル 「こんなに温かく迎えられたのは久しぶりですよ、本当に」

ガラテア 「そりゃ、私たちは化け物なのよ。化け物以外には迎えられないじゃない。だけど、本当のことを言うと、私たちもまたそれぞれ違う化け物よ。誰も理解なんてしてくれないでし

ようし、そんなの期待してはだめよ。まあ、だけど生涯の支えになる人を見つけるのも悪くないわよ」

ミノル 「それでも、異世界に1人ぼっちでよりはよっぽど良いです。特に戻れないならなおさら」

キズキ 「まあな、そりゃ、そうだ」

ガラテア 「今日は、いろいろ考えることもあるだろうし、もう、部屋に戻って休みなさい。あなたがどれくらい強いのかは明日見ることにするわ。これで今日の会議は終了。各自解散。」

ミノル 「リリー以来・・・だな・・・」

なんか、俺泣けてきた。やっぱり同郷の人って最高だね（後書き）

ひとまず、説明がおおいからです。次回はたぶん戦闘が入ると思います。あと、まだ歴代魔王が出てないんですね。次回か、その次くらいには出せると思います。

ゲテモノ・・・だと？ あと、やっぱりチートです、はい。

—— 221階、自室 ——

合成音声 「ミノル様、起床時間です。起きてください」

ミノル 「う、もうそんな時間か。顔洗って食堂行かないと・・・」

合成音声 「231階です」

ミノル 「食堂はここだよ・・・おはようございます、みなさん」

ヤン 「おそよう、4代目。ククク」

シルヴァーナ「気にする必要はないわよ、コイツはだいたいいつもそうだから。だいたいヤン、あなた早すぎ」

ガラテア 「そうです。ヤン、あなたも少し遅く来れば良いのです」

ヤン 「それは無理だな。朝早く目覚めて、やることは何も無い。であればさっさと食堂に来ておいた方が合理的だろう」

シルヴァーナ「それで人に早起きを強要するのはどうかと思うけど」

ヤン 「べつに強要してるわけではないさ。ただ、さっきも言ったように何もすることがなくて暇だからな、嫌味の一つ言うだけで、相手の不快そうな顔も見れて、実に暇潰しになるというわけだ」

ミノル 「聞いたとおりの嫌味っぷりですね」

ヤン 「誉め言葉として受け取っておこう」

ガラテア 「こんな性格でも参謀ではあるしね」

ヤン 「やあ、おそよう。キズキよ」

キズキ 「はいはい、おそよう、おそよう。お前だけに」

キズキ 「よう、新人、昨日はよく眠れたか。たぶん初戦は俺だからしっかり食つとけよ」

ミノル 「うわあ、いきなりあなたとなんですか。消耗戦になりそうだ」

キズキ 「まあ、お前は強いから、俺くらいには勝つだろう、俺はこの中でも4番目だからな、今のところ」

ミノル 「これで決めた強さってなんか関係することがあるんですか？」

ガラテア 「そうね、まあ一番強ければわたしみたいにまとめ役になってもらうけど、他には、まあ年あたりの休日の数、あ、私たちの仕事は主に議会で可決されたことや市民からあがってきてる苦情とかを見て対処したりすることと、ギルドや軍の訓練の視察とかね。何もしないわけじゃないわ。まあそう、だから休日の数とああ、主催できるイベントの数とかね。何かイベントを開けるけれど、これの半年あたりの回数に制限をかけるわね。ただし、これらの費用や準備は自分持ちよ。過去あったのはまあダンジョン作って宝搜しとか、魔術、魔法なし純粹な剣術大会とかかな、都市や、魔界に広告出して、参加者募ったりして、結構集まるわよ。これで儲けた金も全部自分の物になるし。まあ、そのくらいね。あ、まとめ役の座は渡さないわよ、これでも気に入ってるから。2番目の参謀くらいならしてあげられるけど」

ヤン 「そんな気は、さらさらありませんな」

キズキ 「まあ、つまりがんばれてことだ」

シルヴァーナ 「わたしも負けるつもりはないからな」

合成音声 「皆様、食事をお持ちしました」

ガラテア 「ああ、これについて説明してなかったわね。毎回、食事はこんな風に1人1人違うけど、これも強かった順から選ぶわ。それから、1つだけ必ずゲテモノが入ってるから注意。まあ、見ての通り巧妙に隠してあるけどね。それにゲテモノって言っても

変なのは出ないわよ。創作料理の新作が実験的に出されるだけだから、まあ常に新しきに挑戦しててとんでもないのが出ることもあるけどね。ちなみに一番新しかったのは魚のムニエルアイスクリームソース添えかしら。ああ、それから何に当たっても必ず食べること、言うわけでわたしはこれね」

ヤン

「では、わたしはこれにしよう」

シルヴァーナ「あ、それわたしがとりたかったのに。じゃあ、わたしはこれにしようかしら」

キズキ
だ・・・」

「今日は2つあるんだ、どちらかが安全なはず

ガラテア

「あ、キズキが迷ってる、迷ってる。フッフ」

ヤン

「まあ、一番被害に遭った回数が多いからな」

キズキ

「よし、これにしよう」

ミノル

「じゃあ、僕はこれで」

ガラテア

「では、今日の被害者は誰になるやら、フッフ」

ガラテア 「あら、今日のはましなやつだったようね。ちなみに
アイデア、今日のあたりは誰が食べたの」

合成音声 「ミノル様でございます。アレはコーヒーではなくて、
黒豆の煮汁に苦みをつけただけの物です。」

ミノル 「道理で妙に甘いわけだ」

キズキ 「だから、そんな酷い物ばかりじゃないって言うて
るだろう。あ、それからこいつの紹介をしてなかったな、アイデア自
己紹介してやれ」

アイデア 「それは、失礼しました。私は統合情報処理機械人形
兼ここの人工知能、及び皆様の世話をするための汎用機械人形を操
作しております、第25機械人形アイデアと申します。お困りのこと
がありましたら何なりとお申し付けくださいませ」

キズキ 「よし、と言うわけだから、今から上に行こうか、そ
こで行われるからな。あと、これは一応半年に一回やるけど、一回
決まるとそう簡単には変わらないぞ、何せ能力が能力で強力なのば
っかだからな」

ガラテア 「そうね、じゃあ上に行きましょう。シルヴァーナとヤン
は自分の仕事やっときなさい。ああ、後本当はこれ、リーグ戦だけ

ど、それはまた今度の時に。時期も違うから、今回はあなたが全員と戦うことになるわ。じゃあ、上に行きましょうか」

イデア 「300階です」

ガラテア 「ここは、まあよっぽどのが壊れないようになってるから、思いっきりやって良いわよ」

ミノル 「宝具の類いはどうでしょう？」
『打ち砕かれし幻想』
ファイナルアタック
「にも耐えられますかね」

キズキ 「おい、おい、俺の宝具壊すぜ発言止めてくれ、まあ、大丈夫だろうがな、この部屋はそんなに簡単には壊れんよ。あと、宝具は使っても良いが、召喚の類いはだめだな。だから俺も側近達が使えなくて困るんだよ」

「それはお互いのフェアのためですから」

ガラテア 「それじゃあ、そろそろ始めようかしらね。あなた達は部屋の中央の方に行きなさい。あとは適当に初めて」

「分かりました」

「おづ
キズキ」

「じゃあ、始めようか。3 2 1」

「死んでください……よ!」

「危ないねえ、あんな一撃でやられたらたまらん」

ミノル 「さすがに、これくらいよけますか。だけど、そんなことしてる暇はないですよ。」
『複製』 『打ち砕かれし幻想』
ファイナルアタック
「……」
『複製』 ……
『複製』 ……」

キズキ　「おお、さすがにこの爆発の嵐はきついねえ。どれ止めてもらうか。穿て、『神殺しの槍>ロンギヌス<』」

「よけるまでもありませんよ」

キズキ 「どんな物でも貫通することになっていたんだが、軌道をずらされるとはな」

ミノル 「僕のロープは防ぐではなく躲すなので、と言う概念ですからねえ」

キズキ 「じゃあ、こっちなえ、やれ、『勝利を約束する槍>グングニル<』」

ミノル 「『必中』ですか。コイツはやっかいだな。――『複製』 やれ『勝利を約束する槍>グングニル<』」

キズキ 「空中で当てて相殺か。やっかいだな、このパクリやろう」

ミノル 「オリジナルより優れてるんですから、パクリではなく、改良だといってください」

キズキ 「そうか、では、これはどうだ」

ミノル 「ぐっ……」

キズキ 「筋肉で止めた……馬鹿な、あらゆる魔法効果に向こうにするはずだが、この化け物め」

ミノル 「ありがとうございます、また新しいのをストックしてきました。そして終わりですかねえ。――『複製』」

キズキ 「ぐっ……がは……」

ガラテア 「そこまでね」

ミノル 「うう、まだ少し痛みが残るぜ。容赦ねえなあ、全く。いきなり疲れそうになったら、爆発のあらしだしな」

ガラテア 「あの戦い方は、ミノルならではの感じね。集団戦は敵なしかしら。魔法は、詠唱もなく完成形がでたから、アレも複製？」

ミノル 「そうです、一度見れば、その段階を複製できるので、魔術師と戦う時もほぼ同時に相手と同じじものを発動できますね」

ガラテア 「うわ、ちょっといやなタイプだなあ。できれば敵にいたくないわ。そうね、次は明日でしょうか、それともまだやれる？」

ミノル 「いえ、ちょっと今日は疲れましたし、終わっていただけたのでしたら」

ガラテア 「そう、じゃあ次は明日ね。キズキ、あなたは、また食事被害者NO・1になれそうよ」

キズキ 「そ、そんなあ」

ガラテア 「じゃあ、もうすぐ昼食もあるから、そのときはまた食堂に。魔王達も紹介することになると思うわ」

ミノル 「分かりました。では昼食時に」

魔族って、魔族に生まれただけで勝ち組みたいなもんだな

—— 食堂 ——

ヤン 「今回は早いじゃないか。暴れすぎて腹でも減ったのか」

ミノル 「早く来ても皮肉を言われるんですね、僕は。まだ昼食には30分くらいあったと思いますけど」

ヤン 「お前だけじゃないさ、俺より遅いやつ全員に言ってるつもりだ。それに皮肉を言うのは俺の数少ない楽しみの一つだね。言われなくなれば俺よりも早く来るんだな」

ミノル 「……………」

ヤン 「……………」

ミノル 「何の本を読んでいるんですか」

ヤン 「ん？ ああ、『反魔術結界の構築および解除法』だ」

ミノル 「反魔術結界ですか、あなたなら攻撃そのものを吸収できるでしょう」

ヤン 「魔術はあまり食えないよ、濃すぎるんだ。だから反魔術結界。君の得意分野じゃないかい？」

ミノル 「ええ、まあ。相手の魔術を瞬時に解析できますから、あとは結界の構築だけですからね。反魔術の一番難しいところを楽にできるわけです。まあ、相手と同じものの複製して相殺した方が早いんですけど。まあ、開発中の『完全防御結界 イージスの盾』には、もちろん組み込んでますけどね」

ヤン 「魔術開発もするんだな、魔術の腕だけならガラテアなみですか」

ミノル 「彼女はやはり強いんですか」

ヤン 「ああ、強いね。ついでに敵には容赦しない。まあ一応彼女は最強だからな」

ミノル 「はあ、まだ戦ってもいないのに、負ける気分になりますよ」

ヤン 「まあ、まずは明日わたしを倒してから考えなさい、シルヴァーナはおそらく戦わないでしょう」

ミノル 「なぜです？」

ヤン 「彼女が倒せる手段を持ってないからだよ。君の概念防具を突破できる武器を彼女は持っていない。それだと、彼女はどうせ時間の無駄だからと戦わないんだ。彼女はそういう考えの持ち主なのさ」

ミノル 「そうですね、それで明日はあなたと戦う羽目になるわけですか」

ヤン 「戦う羽目とは、失礼だな。まあ手加減するつもりはさらさらないが、おそらく負けるのはわたしだろう」

ミノル 「そんな堂々と言えることなんですか？」

ヤン 「わたしは冷静に分析してるだけだよ。考えてみる、わたしは確かに食べて攻撃を無効にできる。しかし、一度に食べられる量には限界があるんだ。君が無制限に複製できる攻撃を全てそれだけで防ぐのは不可能なんだよ。まあ、だから今この本を読んでいるんですが、役には立たないだろう。それにわたしも君の防御を突破するほど強力な概念魔法を持っていないしな」

ミノル 「じゃあ、ガラテアさんと戦うとどうなると思います？」

ヤン 「さあ、ガラテアが最初から本気なら、君は瞬殺されると思いますよ」

ミノル 「例の『死を与える能力』ですか？ アレで僕を殺してしまうと」

ヤン 「まあ、そうなんだけど、アレは勇者には効かないんだよ。だから殺すのは君じゃなくて、君を守ってる概念、その宝具さ。後は適当に大魔法放てばもろ食らって即死、って感じだろうね」

ガラテア 「はい、そこでストップです。勝手にわたしの能力をしゃべらないでください。暇潰しにならあなたの能力でも教えてやればよかったですよ」

ミノル 「て、うわ。いきなり肩つかまないでくださいよ」

ガラテア 「あら、残念。嫌われちゃった。全く、情報は命なのに。あ、ミノルくん、そ、そんなことないですよ。とか思ってるでしょう」

ミノル 「そ、そんなことないですよ」

ミノル （この人エスパーなのか、なんで分かるんだ）

ガラテア 「エスパーじゃないよ、フフフ。と言うか、もちろんさっきのは冗談よ、冗談。勝手にわたしの情報を聞いてたから、お返し」

ミノル 「本当にエスパーじゃないんですか？ と言うか、何のためにそんなことを」

ガラテア 「そりゃあ、反応が面白そうだからよ。ミノルくんて。あ、それとわたし大嘘つきだから。何気ないことで平気で嘘付くからね。気をつけた方がよいよ」

ミノル 「なんで、そんなことを・・・」

ガラテア 「あら、嘘吐きて言うのが嘘よ。嘘吐きが自分のことを嘘吐きなんて言うはずないじゃない」

ミノル 「もはやあきれて言葉も返せませんよ」

ガラテア 「よく言うわ。そろそろみんな来ると思うから。もう少し待ってなさい。魔王達も紹介しないといけないしね」

ガラテア 「全員集まっ たわね」

ミノル 「朝はどこに行つてたんだ、マルティナ？」

マルティナ 「ええ、なつかしい弟子達に会つたもので、ちよつとどのくらい強くなつたか確認をね」

初代魔王 「師匠は相変わらずの強さですよ」

2代目魔王 「本当にな。元魔王3人同時に相手して押し切るなんて、ありえん」

3代目魔王 「魔王の時に戦うべきでしたわね、まあそれでも勝てるかはわかりませんが」

ミノル 「弟子達つて、まさか後ろにいる魔王達か？」

マルティナ 「元”魔王よ。ええ、まあそうね。まさかみんな

私の弟子なんて。これもなんかの縁なのかしら」

ガラテア 「それじゃあ、あなたたちには自己紹介してもらおうかしら。まずワーレンから」

ワーレン 「ワーレン・クリティウスと言います。一応初代魔王ですかねえ。今はキズキの副官やってます。まあ、やるのはキズキがための書類や始末書の処理ですが。ああ、火竜族です。一応歳は2500歳くらいですよ。一応師匠を除けばここにいる中では最年長です。まあ、キズキは面倒かけるとも思いますけど、よろしくお願いします。ミノルさん」

ミノル 「副官がそんなことを言ってもいいのか、まあ、よろしくお願いします」

キズキ 「おい、ワーレン、余計なこと言わなくていいんだぞ」

ガラテア 「はいはい、それじゃあ次はブトレマイオス」

トレミー 「ブトレマイオス・シュヴァルツエンベック。トレミーと呼んでくれ。吸血妖魔だな。2代目だよ、ガラテアの副官をしている。ああ、ついでに結婚もな。まあ、ワーレンとは違って、楽な副官だよ。よろしく」

ミノル 「こちらこそ、よろしくお願いします。へえ、聞いてはいたけど、本当に結婚してるんですねえ」

トレミー 「まあな。ガラテアは良妻だよ」

ガラテア 「ほめても何もでませんよ。じゃあ最後に、フレイヤ」

フレイヤ 「フレイヤ・ヴァナディースよ。フレイと呼んで。3代目魔王、今はヤンの副官兼妻。美鬼族頭領もまだやってるから、あまり副官らしい仕事もしてないけどね。着てる和服はキズキからもらったのよ。軽いし、防御もなかなか、お気に入りよ。あなたたち日本の衣服を魔術で強化したものなんですよ。まあ、よろしく」

ミノル 「・・・なんで魔族は美人が多いんだ。と言うか西洋系に和服でポニテでしかも一本角とかどんなファンタジー・・・やっぱ魔族って勝ち組なのか」

フレイ 「あらあら、かわいい坊やね。お姉様はこの猫かぶりと違って良い物をあげるかもよ」

ヤン 「フレイは男癖が悪いから、あまりおだてるなよ」

フレイ 「あら、本当に愛してるのはあなただけよ、ヤン」

ヤン 「そのくせ他の男と遊ぶから男癖が悪いって言うんだ」

ガラテア 「ところで、ねえ、ミノルくん。その言い方じゃまるで私たちは美人じゃないみたいに聞こえるわよ」

ミノル 「え、い、いやそんな事はありませんよ」

ガラテア 「ふうん、本当に？」

ミノル 「ほ、本当ですよ？」

フレイ 「そこらへんでやめてあげなさい、猫かぶり。全然怒ってないくせに」

ガラテア 「あら、ばれちゃった、フレイ？ あなたくらいだわ、わたしの嘘見抜けるのは」

フレイ 「さあ、まあ、何となく分かるわよ。本当か嘘かくらい」

ガラテア 「それはきっとフレイだけね」

イデア 「皆様、食事の用意ができました」

ガラテア 「さてさて、誰が当たるのかしらね」

キズキ 「う、ぐ・・・水・・・水をくれ。辛、辛すぎ、死ぬ」

ガラテア 「あらあら、全部食べないとだめよ。フッフ」

ガラテア 「午後からはあなたに新しいギルドと、商会についての計画を考えてもらうわ。なにか案があれば4時までには書類にまとめて提出しなさい。データでも良いけど、まだ世界の主流は紙だからできれば紙でね」

南部統一・・・面倒くさい。まあ、まずは腹ごしらえか

『大樹』 4代目執務室

ガラテア 「職人ギルドに、経営コンサルタント・・・か。まあ、確かにどちらもまだないわね。だけど、1つ問題があるわよ。経営コンサルタントは、まず経営コンサルタントは影響力があまりないと言うこと。そしてなにより、企業数が少ないということよ」

ミノル 「つまり、経営コンサルタントは、まだ事業として成り立たない・・・ということですか」

ガラテア 「そうね。職人ギルドは問題ないけど、他に何かやりたいものはある？」

ミノル 「あとは、そうですね・・・」

ガラテア 「なんなら、とびっきりの仕事があるわよ。魔界でもまだ南の方は小国の小競り合いがあるのは知ってるでしょう？」

ミノル 「ええ、たしかに南部諸国は魔王領でもなく、定期的に小規模な戦争が行われているようですね」

ガラテア 「そこで、だけど。あなたには南部諸国を統一してもらいたい。それから、その統治を任されてくれるとうれしいわ。1つの国としてね」

ミノル 「僕が、ここ離れても問題ないんですか？」

ガラテア 「いいのよ。どうせ、普段はここもわたしとトレ

ミーだけだし。みんな各々のギルドや、商会の執務室に普段はいるもの。自宅もここじゃなくて、魔界にあつたりもするしね」

ミノル 「しかし、さすがに僕とマルティナだけというのは……まあ、できなくもないでしょうが」

ガラテア 「何も、そこまでしろということじゃないわ。あなたには、近衛隊だって選んでもらわないと」

ミノル 「近衛隊？ 僕たちほどなら必要ないのでは？」

ガラテア 「そうだけど、自分の手足になる人員はあつた方がよいのよ。諜報とか、情報収集とかにも便利だし。なんなら夜伽でもさせてみる？」

ミノル 「そんなことしたら、マルティナに殺されますよ。しかし、近衛隊か……何人くらいです？」

ガラテア 「そうね、まあ、私たちはだいたい3人〜10人くらいかしら。キズキが一番多いわね。みんな機械人形だけど。13人だったかな。アレはやっかいよ」

ミノル 「自分で選んでも？ 知り合いがいるので」

ガラテア 「あなた……知り合いとかいたのね……ちなみに、人間？」

ミノル 「違います。いえ、ちょっと固有種エクストラに知り合いがおおい物で、頼んでみようかなと」

ガラテア 「普通、固有種は人前に出ないし、気が難しいはずなんだけど・・・あなたどんな300年だったのよ。ちなみに誰と知り合い？」

ミノル 「そうですねえ、スフィックス、ファイニクス、ウロボロス、あとはカーリーの4人くらいですかね。他にも何人かいますけど。たぶん引き受けてくれそうなのはこれくらいです」

ガラテア 「そのメンバーがそろえば、負けることはまずないでしょうね。それに知識や知恵で大きな恩恵が受けられる。ま、だけど、それはここでの試練が終わってからで良いわよ。明日はヤンとでしょ。がんばりなさい」

ミノル 「そうですねえ、負けなと思いますけど。どんな攻撃なのかはよく分かりませんし」

ガラテア 「よく言うこと。さてさて、明日は楽しみね。午後になにかある？ なければ午後にはわたしとやってほしいのだけど」

ミノル 「ええ、かまいませんよ。まあ、今までと違い勝てないでしょうけど」

ガラテア 「あらあら、ずいぶんと弱気ね。さっきまでとは大違いだわ。何か根拠でも？」

ミノル 「あえて言うなら、勘ですけど。僕の『理解』って概念強度関係ないですよ。どんな能力でも見破れる。なれた物で最近はこれからどんなことが起こるのかとか、こんな能力はこれくらいの強さだ、と言うようなことまで考えただけでだいたい

分かるようになったんですよ。で、その結果ただ漠然とあなたと戦えば、負けるという感じがするんですよね」

ガラテア 「未来予知ね・・・まあ楽しめることを期待するわ」

ミノル 「ご希望に添えるよう善処します」

ガラテア 「あら、もうこんな時間。そろそろ食堂行きましようか」

ヤンさん、以外に大食いだったんだな

翌日 『大樹』 300階

キズキ 「誰か・・・何かマシな食べ物・・・ うう」

シルヴァーナ「本当、キズキってよく当たるわね」

ガラテア 「ちよつとそこ、文句言っていないでさつさと来なさいよ。もうすぐ始めるわ」

ガラテア 「念のため確認しとくけど、本当に不戦敗で良いのね、シルヴァーナ」

シルヴァーナ「ええ、かまわないわよ。わたしじゃ勝てないもの」

ガラテア 「ええ、ならいいわ。というわけで、お相手はヤンよ」

ヤン 「瞬殺されない程度にがんばるとするよ」

ミノル 「僕は瞬殺できるとは思ってません」

ヤン 「そうかな？ 君は昨日もまだまだ本気ではなかったように見えたが」

ミノル 「本気でしたよ、普段の戦い方の中では」

ヤン 「まあ、固有種とも交流があると聞いている。

油断はしないさ。私たちの中にも固有種と交流があるやつなんていないしな。一回挑んだことがあるが、返り討ちにあつたこともある」

ミノル 「別に彼らに勝ったわけではないですけど」

ガラテア 「そこも無駄話しない。さつさと初めて良いわよ」

ミノル 「だ、そうです」

ヤン 「では、始めようか。ガラテア、合図をお願いします」

ガラテア 「3、2、1、はじめ」

ミノル 「『転位』・・・『複製』『複製』『複製』・・・
ファイナルアタック
・『打ち碎かれし幻想』」

ヤン 「いきなりか。その展開の速さには驚愕するね。老体をいたわってほしい物だ。『捕食』」

ミノル 「消失した・・・予想外に口がでかいじゃないですか」

ヤン 「君こそ途切れさせて良いのか、口を閉じれば、一瞬で消化できるんだぞ」

ミノル 「そうですね。『神炎』『複製』『術式拡張』」

ヤン 「でかいな、さて食えるかどうか『捕食』」

ミノル 「『術式管制』『対象 神炎』『マクロ追加
術式拡張』『規模 無限大』『完全自動でマクロ開始』」

ヤン 「術式の遠隔自動制御か。このレベルで続け
られるときついのかな・・・『網状結界』」

ミノル 「結界で球数減らすわけですか。わざわざ網状
にして。良いんですか？ 正面から空きです。いい銃の的です。
久しぶりにこの魔法使いますよ。『魔弾の射手』
『複製 魔弾の銃』
」

ミノル 「『ブリーナク起動 確認』『対象補足』『
弾数 1』『弾種 ライフル弾』『術式装填』『弾速100000』
『増幅率20000%』『発動遅延200』『精密射撃』『発射』」

ヤン 「みたこともない魔法・・・『狂化の類いで
すか？ やはり、手も足も出ませんか・・・』『反射結界』『強度
200000』・・・これで防げなければ終わりか」

ミノル 「『付与効果追加 貫通』『弾速変更 300
00』『術式追加 結界干涉』」

ヤン 「さすがの魔力量。『神炎』を無限に拡張、
展開しつつ、これほど精密な制御と魔力。結界では守れんな。かと
いって、捕食対象を変えれば『神炎』に焼かれる。やはり負けか」

ミノル 「『遅延時間0』『術式の発動を確認』『神雷
命中を確認』『対象に致命傷を確認しました』『終了条件を満た
しました』『ブリーナク終了』」

ガラテア 「終了！ 勝者ミノル。ヤン、大丈夫かしら」

ヤン 「まさか、このローブを貫通してここまでダメージとはな。胴体がつながってるのが不思議なくらいだ。回復に少し時間がかかるな」

ミノル 「大丈夫ですか？ すいません、あの状態だと手加減できないので」

ヤン 「ローブは無傷だからな。これに痛覚麻痺をつけてあったおかげで助かった。なければ気絶してたな」

ガラテア 「ローブに傷をつけずに、中だけ攻撃なんて、常識外れな」

ミノル 「『貫通』ですからね。対象だけに当たるようになるんですよ」

ガラテア 「ヤン、治療術かけなくて良い？ 立てる？」

ヤン 「いや、願います。立てなくはないだろうが、さっさとこの気持ち悪い感覚からは解放されたいしな」

ミノル 「あれ、ヤンはおんだけ結界使ってたのに、治療術は使えないんですか？」

ガラテア 「ヤンは『能天の10』なのに支援系があまり使えないのよ・・・本当にどんな構造なんだか・・・『治療』」

ヤン 「やっと解放されたか。しかしこれで『参謀』

の座は奪われてしまったな」

ミノル 「ですけど、僕は、南部の統一もいかないといけないし、そこを治めるとかもしないといけないですから、あまりそれらしいことはできないかもしれせんよ」

シルヴァーナ「よかったわね、ヤン。まだあなたは参謀できそうよ」

キズキ 「しかし、俺と戦った時は全然本気ではなかったんだな・・・」

ミノル 「さつきも言いましたけど、普段の中では本気ですよ。普段『魔弾の射手』とか使いませんもん」
フリーナク

ヤン 「どうせ、まだまだ奥の手があるんだろう・・・
・はあ、おそろしい」

ミノル 「午後はガラテアとですから、見れるかもしれませんがせんよ？ ああ、ガラテアさん、今日から、明日にかけて、友人達が来ると思っているので、来たら通すよう言っただけもらえますか」

ガラテア 「ええ、分かったわ。さて、そしたら昼食かしらね。昼食終了後1時間以内にまた、ここに集合よ。いい？」

ミノル 「わかりました」

キズキ 「おう」

ヤン 「ええ」

シルヴァーナ「了解したわ」

ガラテア

「それじゃ、ひとまず食堂行きましょう」

ガラテアさんはやっぱり牝狐なんですね・・・

食堂

シルヴァーナ「でも、まさか、あそこまで一方的になるとはね。戦わなくて正解だったわ」

ミノル「でも、あなたなら時間停止とかで軽々と避けられるでしょう」

シルヴァーナ「そうだけど、あなたのローブを突破できないのよね。攻撃力不足。どちらにしても負けてたでしょ」

ヤン「戦ったびにあんな怪我をするなら、2度と戦いたくないな。わたしは」

ミノル「あれは、怪我とか言うレベルじゃないと思いますけど」

ガラテア「さて、午後からはわたしとだけど、大丈夫？」

ミノル「せいぜい、瞬殺されないよう、がんばりますよ」

キズキ「お前、どっかで聞いたことあるようなセリフ言ってるなあ」

ガラテア 「瞬殺はしないわよ。面白くない」

シルヴァーナ「それって、やろうと思えばやれるってことよね。全く、ミノルも規格外だけど、ガラテアはそれ以上だわ」

ガラテア 「規格外って何よ、規格外って。どうせ人間の規格はみんなはずれてるんだから、50歩100歩ってやつでしょ。それに、これも嘘かもよ。相手をおびえさせるのは戦略のうちだしね。だけど、ミノルには、強力な宝具の守りもあるし、何より、わたしの能力は勇者には効かないんだから、無理に決まってるじゃない」

ミノル 「なら、いいんだけど」

ヤン 「さっきから、話していないが、キズキどうした？」

キズキ 「うう、誰か・・・水・・・」

シルヴァーナ「今度は何に当たったのよ」

アイデア 「魚の煮付けですよ。ただし、数十種類薬草の汁で煮たものですが」

ヤン 「苦くて食えなさそうだな、おいアイデア、キズキに水をもってきてやれ」

アイデア 「かしこまりました」

その後、300階

ガラテア 「ふう、やっとわたしの番ね。ミノルくん、抱負を一言」

ミノル 「ふざけないでくださいよ。そうですね、本気でいきたいと思います」

ガラテア 「また、普段の中で？」

ミノル 「いえ、正真正銘、本気です」

ガラテア 「楽しみだわ。じゃあ、そろそろ始めましょうか。誰か合図お願い」

シルヴァーナ 「任せて。3、2、1、はじめ！」

ミノル・ガラテア 「『転位』」

ミノル 「『魔弾の射手』プリューナク 複製 魔弾の銃』プリューナク」

ガラテア 「いきなりそれか。・・・『神結界』イージス 魔力物質化 円錐』 数 無制限』 対象 ミノル』」

ミノル 「『ブリーナク、バーサーカーモードで起動確認』『リミッター解除』『対象補足』『対物術式を確認』『術式書き換え 対象 自分へ変更』」

ガラテア 「く、『術式解除』・・・術式の変更か・・・境界も破られるかもね。ていうか、もしかして、魔術全て無効ってこと！？ 冗談じゃないわよ」

ミノル 「『弾数1000』『弾種 散弾』『術式装填』『弾速 20000』『効果付与 貫通』『術式展開 剣の雨』『発射』」

ガラテア 「（く、殺しきれるか・・・？）『終了せよ』」

ミノル 「『装填術式の強制解除を確認』『原因不明』『術式展開 把握空間』『術式の再装填を開始』『設定引き継ぎ』『発射』」

ガラテア 「またか、攻撃にでる暇がないわね。『終了せよ』」

ミノル 「『装填術式の強制解除を確認』『原因 正体不明の加護によるものと判断』『術色再装填』『設定引き継ぎ』『効果付与 概念保護 最大』『発射』」

ガラテア 「『終了せよ』」

ミノル 「『3度装填術式の強制解除を確認しました』『攻撃パターンBへ移行』『複製 この世には無き法則』『数 無制

限』『攻撃方法 剣の雨』『打ち砕かれし幻想』『発動』」

ファイナルアタック

ガラテア 「この前のキズキのやつか。さて、キズキ、鬼畜性能にしないでしょ。うね。殺し続けられるかしら？『終了せよ』……」

ミノル 「『着弾数……0』『複製物の完全消滅を確認』『術式解除』『術式再構築』『設定引き継ぎ』『概念保護……』」

ガラテア 「さて、そろそろ終わりにしますか 『終了せよ』」

ミノル 「『ブリーナク強制終了』『原因不明』『ブリーナクを終了します』」

ガラテア 「即座に終了しないのね……どんな仕組みなのか非常に気になるわ。『終了せよ』」

ミノル 「う……」

シルヴァーナ「勝者、ガラテア！」

ミノル 「うう、な、何が起こった」

シルヴァーナ「あ、起きた」

ガラテア「なにちよっと『殺した』だけよ。しかし、こんな短時間で起きるなんて、よっぽど概念強度が高いのね」

ミノル「勇者には効かないんじゃない？」

ガラテア「言ったでしょ、わたし嘔吐きなの。敵を騙すにはまず味方からってね。しかし、これで使ったのは初めてだわ」

ミノル「騙された・・・まあ、負けるのは予想通りでしたけど。まさか殺されるとは」

キズキ「いつ実験したんだ？ 使えるのが分かっていたんだろう」

ガラテア「ええ、しばらく前に、あなたが、目が覚めない時があったわよね。5時間くらい」

キズキ「ああ、あのときは、仕事疲れもたまってたし過労かと思ったんだが」

ガラテア「ところがそうじゃないのよ。もちろんわたしがあなたに仕事を多く回したり、疲れるように魔法もかけてたけど。あれはわたしがこっそり実験で『殺した』のよ」

キズキ「おい、お前！　なんてことしやる」

シルヴァーナ「さらっととんでもないことするわね、あなた」

ヤン 「しかも用意周到にな」

ミノル 「だから牝狐なんですね・・・」

ガラテア 「ミノルくん、何か言った？」

ミノル 「いえいえ、何も言ってませんよ」

ガラテア 「そう、ならいいけど」

アイデア 「失礼いたします。ミノル様、来客でござい
ます」

ミノル 「ああ、分かった。案内してくれる？」

アイデア 「かしこまりました」

ミノル 「じゃあ、ちよつといくから、またあとで」

ガラテア 「待ちなさいよ。どうせあなたの友人達なん
だよ。紹介しなさいよ。夕食ついでに。再会祝いだ
つてあるし、宴会といきましょう。今日は疲れたわ」

アイデア 「かしこまりました。最高のおもてなしを
いたします」

ミノル 「じゃあ、先に行つて、みんなに伝えてくるよ」

ガラテア 「ええ、じゃあ、私たちは、宴会のセッ
ティング

をしとくから、顔合わせがすんだら来なさい」

ミノル 「分かった」

ガラテア 「さあ、残りは宴会のセッティングよ」

キズキ 「ういっす。久しぶりに当たらなそうだ」

ヤン 「あまり食欲は無いのだが・・・」

シルヴァーナ 「さっき胴体あな開いたしね」

ヤン 「思い出したくもない・・・」

ガラテア 「ほら、さっさと行く」

者ども、飲め、食え、今宵は宴なり！・・・なんてね・・・

客間

ミノル 「まさか、手紙送って全員来るとは思わなかったよ・・・ゴモリーに、婆ちゃん、みんなも。カーリーはまだこういうの好きだと思ったけど」

マルティナ 「なんで疑問系なのよ・・・」

ゴモリー 「私たちは大概暇なのです。このような面白い話に乗らぬ訳にはいかないでしょう？」

フェネクス 「そうでございますよ。最近暇をもてあましておりまして」

カーリー 「ねえねえ、ミノ？ そんなーなんだから、いっぱいころしていいんでしょ？」

ウロボロス 「おいおい、俺たちって信用ねえな？ 姐さん」

マルティナ 「しかし、私も固有種がみんな集まるなんて思いにもよらなかったわ」

ウロボロス 「ええ！ そりやないです、姐さん」

ミノル 「まあ、まずはみんな、久しぶりだな」

ゴモリー 「ええ、久しぶり」

カーリー 「ひさしぶり！ ミノ！」

フェネクス 「久しぶりにございます」

スフィンクス 「150年ぶりくらいですかね」

ウロボロス 「俺は140年くらいかな？」

ロノウエ 「ようやく面白そうなイベントを起こしましたね、あなたは」

クローセル 「相変わらずで何より」

ストラス 「この老いぼれもできる限りのことをしますよ」

ダンドリオン 「久しぶり・・・」

ヘカトンケイル 「久しぶりっす」

サブノック 「久しぶりだな」

ミノル 「しかし、固有種11人も集まるなんて・・・まあ、いいや。みんなには手紙でも伝えたけど、南部諸国の統一と、統一後の国で主要人物として国を担ってもらうことになる。長いつきあいになると思うけどよろしく」

マルティナ 「長いなんて言ってもあなたたちにとっては一瞬でしょうけど。さ、今日は宴席が用意されてるわ。宴の間へいきましょ」

宴の間

ガラテア

「想像以上の集まりね・・・」

シルヴァーナ

「わたしの時もこんなだったのかしら・・・」

カーリー

「ミッノ、あれとって」

ミノル

「はいはい、ちょっとまってな」

ロノウエ

「ああ、別にわたしがやりますよ。ミノルはお

気になさらず」

ミノル

「いいよ、あまりこう言うこともできないし・

・・・ほら」

カーリー 「ありがとー、ミノ」

ロノウエ 「全く、子供に弱いと言いますか・・・見かけに騙されたいけないですよ」

カーリー 「うーロノウエー。きこえてるよー あとでひさしぶりにおせっきょう？」

ロノウエ 「その必要はありません」

ミノル 「お前も、すっかり年下にしつけられてんじやねえか」

ロノウエ 「いえいえ、これも拾った者の役目です」

ミノル 「お前も苦勞してんな・・・」

キズキ 「あんなガキも固有種って言うんだから、すげえよな」

ヤン 「全くです・・・」

フェネクス 「ホッホッホ、私のような老いばれもおりますよ」

キズキ 「婆さん、いたのかよ」

ストラス 「儂等老いばれは月見酒が一番ですよ」

ヤン 「ストラスさんまで・・・」

ストラス 「わしのことなぞ、じいさんで十分ですよ」

キズキ 「しかし、じいさん達すげえな。全然気づかなかったぜ」

フェネクス 「伊達に40000年生きてませんからのぉ」

キズキ 「うはぁ、俺たちなんてまだまだ若造っことか」

ヤン 「年季が違うな・・・」

ガラテア 「それで、そのあとはどうなったんですか？」

ゴモリー 「それがね、あとちよつとで押し倒せたのよ、ミノルったら悪いタイミングで起きてしまつて・・・勇者の耐性の高さも困りものだわ」

ガラテア 「参考になりますね。さすがにレベルが違いますか」

クローセル 「そついうのを話すのはいいですけど、誰もいな

いところでしてください。聞いてて恥ずかしい・・・」

ヘカトンケイル「そうっすよ。あまり聞いてると耳が腐るっす」

ゴモリー「あらあら、嫉妬かしら。ふゝ」

ダンダリオン「タバコ・・・やめて」

ゴモリー「これは魔法のキセルだからイイの。別に害はないわよ。なんせ”魔法”なんだから」

ガラテア「今度トレミーに使ってみようかしら・・・？」

ウロボロス「姐さん、今日はいつぱい連れてますね」

マルティナ「こいつらは、昔の教え子よ。魔王なんかになっちゃてて」

プトレマイオス「元”元”ですけどね」

ワーレン「あなたとは比べものになりませんし」

フレイヤ「ええ、比べられないくらい弱いわ。私たちねえ、あなた、いい男ね。今夜予定ある？」

ウロボロス 「すいません、お断りします」

フレイヤ 「ちょ、なんでよ。即答？」

ウロボロス 「寝るだけなら良いですけど、美人は歓迎ですし。だけど、体を重ねるのはお断りしてます。みんな満足できないから、平等じゃないんすよね」

フレイヤ 「え？ みんなって？」

ウロボロス 「姐さん言つてなかったんですか？ 俺、蛇の集合みたいなもんなんですよ。本来は大蛇ですけど。それも蛇が集まってできてるんで。こんな風にばらけられるんです」

マルティナ 「やめなさい、食事中よ。蛇を出すだけならまだしも。腕が無数の蛇に変わるようなのは見たくないわ」

ウロボロス 「すいません。姐さん。・・・これでいいですね。と言っわけであきらめてください」

フレイヤ 「分かったわよ・・・せっかくいい男なのに・・・」

クローセル 「ここは才能に満ちあふれててうらやましいで

す」

シルヴァーナ

「あら、そうなの？」

クローセル
のでしょう」

「良い人材が集まっています。よほど指導が良い

サブノック

「うむ、ここの兵士達もなかなかの動きだった」

シルヴァーナ
せんけど」

「わたしはあまり詳しくないから、何ともいえま

スフィンクス

「ここは人も多くてゲームのし甲斐があります」

シルヴァーナ

「たとえばどんなのを？」

スフィンクス 「そうですね。汝に問おう。声は1つで、脚が2
つ、3つ、4つある生き物は何か？」

シルヴァーナ
のね？」

「有名ね。答えは人よ。にしても急に口調変わる

スフィンクス
？」

「癖ですから。こっちの方がそれらしいでしょう

シルヴァーナ

「まあ、それもそうね」

神様、聖霊様、なんで戻してくれないんですか、

・・・ま、魔王を倒せば

翌日 『大樹』 4代目執務室

ガラテア 「さて、せっかく来てもらったけど、あなたたちには南部諸国統一のためにアルマガルド公国に言ってもらわね」

ミノル 「アルマガルドへ？ なぜアルマガルドなんですか？」

ガラテア 「知つての通り、あそこは四方を険しい山々に囲まれてる上にあの周りは魔力濃度が薄すぎて機竜は飛べない。さながら天然の要塞だけどアルマガルド公は攻められないとか思ってた軍備ほったらかしで、悪政をしき、遊び放題。いろいろ酷くて反乱組織ができてるのよ」

ミノル 「で、それに手を貸し、国を乗っ取った上で南部諸国を占領しろと？」

ガラテア 「ええ」

ミノル 「そう簡単に王座をくれるんですか？」

ガラテア 「あそこを組織したのが私たちなのよ。あの豚を引き摺り落とす代わりに、こちらから王を立てる。それが契約なの」

ミノル 「用意周到なこと。分かりました。今すぐにでもいきますよ。ただ、アルマガルド入ったことがないので、

写真ありますか？ できれば首都のものが望ましいです」

ガラテア 「あるけど・・・ほら。そんなのどうするの？」

ミノル 「僕の『転位』は特殊なもので、写真でも別に良いんですよ。実際に言ったことなくても見れば」

ガラテア 「ほんと、非常識。ええ、行つてらっしゃい。ああ、それと、あなたの能力の制限を言つとくわ。あなたの能力で、魔導艦とか機竜とか軍事兵器を複製しないこと。あなたも含めてあなたたちは極力戦場で先頭に立たないこと。まあ、力を見せつけるくらいなら良いけど。わかった？」

ミノル 「面倒ですね。それで猶予は何年もらえるんです？」

ガラテア 「そうね。別に気長にいいわよ。あそこは軍備も教育も全然だから、そこも改善しないといけないでしょうし」

ミノル 「では、なるべく早くできるようにします」

ガラテア 「じゃあ、行つてらっしゃい」

『大樹』前 広場

ミノル

「待たせた？ ちょっと長引いたけど」

マルティナ

「そんなことないわよ」

ゴモリー

「きたんならいきましようか」

ヘカトンケイル 「そうっすよ、早く行きましよう。で、どこにいくんです？」

ミノル

「アルマガルド公国だけど」

フェネクス
「いところで」

「アルマガルドですか・・・またなかなか凄

ストラス

「儂としては最高の立地だと思うがのお」

ミノル
「奪還からです」

「まず僕たちは反乱軍に協力して政権の

ダンダリオン

「・・・余裕」

カーリー

「みんな、ころしていいよね、ね？」

ミノル

「だめだよ。と言う搔板はなしだと、宮殿の警備隊はおるか、近衛隊までも反乱軍の仲間らしいけど」

ダンダリオン

「それは、我々が行く必要も無いんじゃないのか

？」

ミノル 「僕たちが、その後の後処理とかするからね。反乱を組織したのがガラテアさん達らしくて、その見返りが王座なんだもん」

ウロボロス 「こんなところで話して時間つぶすより、さつさと『転位』しちまおうぜ」

???? 「ちょっと待つんじゃない！」

ミノル 「は？・・・てお前、え・・・と、なんでここにいるの？魔王？」

フローザ 「お主、今妾の名前を忘れておっただろう。フローザじゃ、フローザ。まったくこれだからお主は・・・」

ミノル 「で、なぜお前がここにいる？」

フローザ 「決まっておるだろう。お主について行くためだ」

ミノル 「それはガラテアさんに言ったのか？」

フローザ 「いや」

ミノル 「じゃあ、却下だな」

フローザ 「ふむ、じゃあ少しまっとれ。『念話』・・・
おお、ガラテアか？ 妾もミノルについて言っていじやろう？」

は、今？ 今広場におるぞ。『大樹』の」

ガラテア 「な・ん・で・あなたがここにいるのかしら
！！？」

フローザ 「おお、転位してきたか。どうじゃ、妾もつ
いて行っていいじゃろう？」

ガラテア 「だめよ！！ なにかんがえてるの」

ゴモリー 「ふふふふ」

フローザ 「お前、何がおかしいのじゃ」

ゴモリー 「いやいや、こんな知性の低いのがいるんじ
ゃ、フェンリルが哀れと思って。ねえ『人狼（フェンリルの子）』」

フローザ 「な・・・貴様、妾を愚弄するのか！まし
てや我らが神であるフェンリル様は貴様にかける哀れみなど無
いわ」

ゴモリー 「あらあそうかしら。確かにフェンリルは
強かったし、知性もあなたよりは優れてたけど、私の前ではいつま
でも子供だったわよ。かわいかったわあ」

フローザ 「何を知ったような口を。ましてや子供扱い
など」

ゴモリー 「あら、だって知り合いですもの」

フローザ 「・・・は？」

ガラテア 「え？」

ゴモリー 「だから、知り合いつて言ったのよ。知り合
い。いえ、友人かしら。下界に来てからはせいぜい念話くらいだけ
ど。時々お茶もしてるわよ」

ミノル 「そうか・・・言つてなかったけ」

ガラテア 「そしたら、まさか、ゴモリーで、あの？」

ゴモリー 「いかにも。わたしが、運命の女神とよばれ
るあの『ゴモリー』 まあ、過去、現在、未来が見えるだけで操れ
るわけじゃないのだけど」

ガラテア 「あわわ・・・ （しかし、なぜ神族が魔界
なんか・・・？）」

ゴモリー 「監視役よ。ちなみに『^{あいつ}聖霊』は地上の監視
役」

ガラテア 「（なんで、神界のNO・1と2が監視役な
んてしてるんだろ・・・というか、仮にもあなたより位が上なはず
なのに『あいつ』なんて呼んで良いのかしら・・・？）」

ゴモリー 「もつともな質問に聞こえるけど、あなたが
仮にも、いえ真正正銘の神族であるわたしを『あなた』呼ばわりす
るのと変わらないわ」

ガラテア
した？」

「え？　・・・・・・・・もしかして聞こえてま

ゴモリー　「いや、あなたはしっかり心の中にとどめて
たわよ。精神障壁はぼろぼろになってたけど。わたしくらいになる
と勝手に流れてくるのよね。心の声」

ガラテア

「ああ、さっきからの無礼を許してください」

ゴモリー　「べつに責めてないわよ。そうね、『あいつ』
呼ばわりするのは単純にあいつに依り代が無いからよ。私たちは依
り代の名前なんだから。このエルフの名は『ゴモリー』と言ったし、
フェンリルの依り代の狼は『フェンリル』と言う名前だった。それ
だけよ。まあ、私たちが入ればたいで突然変異を起こすけど」

フローザ
のじゃ？」

「じゃあ、なんで『聖霊』様は依り代が無い

ゴモリー　「単純に力が強すぎて耐えられるような依り
代がないのよ。まあ、自分の意思なんかは今でこそ、人間から選ん
で伝えられるようだけど」

ガラテア

「ああ、それが聖霊教・・・」

ゴモリー　「そう。まあ最近は何老院が牛耳って言う
こと聞かないとか悩んでたけど。そういえば最近教主死んだんだっ
け」

ミノル
し」

「そうだよ。だから僕もこっち来たわけだ

ガラテア
よ・・・」

「なんで、あんたは神族に知り合いがいの

ミノル
「いや、教主と話す時に聖霊様も来ること
があつてな、それでゴモリーとも知り合ったし、フェンリルも顔見
知りだぞ」

フローザ
「さすがは妾の夫になる男だ」

ミノル
「いや、その気は無いが・・・」

ガラテア
「ああ、だからあまり戻れないと帰っても驚
いてなかったんだ」

ミノル
「ええ、聖霊様に聞くとそれとなくごまか
してましたし・・・」

フローザ
「で、言ってもいいですよね」

ガラテア
「だめ。ほら、余計な時間食わせちゃったわ
ね。さっさといきなさい」

ミノル
「ええ。じゃあいきます『転位』」

神様、聖霊様、なんで戻してくれないんですか、

・・・ま、魔王を倒せば

第2章です。南部諸国統一くらいまで？

2しても後半他の固有種達空気ですね・・・

ちなみに固有種達とマルティナ含めた12人で『12柱』なんて呼ばれます

革命だ！！とか派手じゃ無かったなあ・・・

——アルマガルド公国首都オルゴルン——

ミノル

「ここが首都か・・・」

マルティナ

「思ったより寂れてるわね」

ストラス
が・・・」

「ここまで土地も荒れ果ててはいないはずだ

ゴモリー

「おかしいわ。精霊の気配が感じられない」

ストラス

「精霊はこの土地にもいるはずじゃが」

ミノル

「聖霊？」

ゴモリー

「その『聖霊』では無く『精霊』 まあ土地

に必ずいて、その力が自然のエネルギーになってるのよ。だけど、
ここでは感じられない」

フェネクス

「だから、こんなに荒れてるのですかねえ」

マルティナ

「なぜいないのかしら」

ウロボロス
じゃないすか？」

「あまりにもこの人間が酷いんで見捨てたん

クローセル 「確かに酷ければ見捨てると言うこともあるらしいが・・・」

ダンダリオン 「ちよつと、周り探る・・・」

カーリー 「ねえねえ、こここのひとにきけばなにかわかるんじゃないかなー？」

スフィンクス 「良い考えですけど、精霊達のこととは分からないでしょうから、せいぜいいつぐらいからなのかと言うことくらいですネ」

ロノウエ 「さて、どうしたものでしょうね」

ヘカトンケイル 「精霊達に直接聞くってどうっすか」

ゴモリー 「今聞いてるわ。どうもこのアルマガルド公つてのはたいそう醜くて下水男だと言うことも分かったわよ」

サブノック 「そのための我々であろっ」

ミノル 「具体的にはどんなことを？」

ゴモリー 「こんなところで話すのもね・・・早いとこ合流しましょう」

マルティナ 「それもそうね。ミノル、案内しないさい」

ミノル 「といつても、城に行くただけだね」

マルティナ 「は？ え、なんで城なの？」

ミノル 「さっきも言っただけどこの王族？ いや
公国だと公族？ 以外はほとんど反乱軍、それ以外は傍観組にまで
なってるなんて言う酷い有様らしい」

ゴモリー 「あんな酷いことしてりやね・・・精霊達は
革命が成功したら戻ってきてくれるそうよ」

ミノル 「じゃあ、まずは城に行って宰相様にでも
会いますか」

アルマガルド城、会議室 宰相とミ

ノルの2人
宰相 「ようこそ来てくださいました」

ミノル 「いやあ、まさか本当にここまで酷いと
は・・・」

宰相 「政策に反対すれば即斬首と言われて、
反対するやつなんかいませんよ・・・しかし、あなた方の支援には
感謝しています。おかげでここまで人数と武器をそろえられました
し。あとは突撃あるのみです」

ミノル 「本当に、その後は私たちに国を任せて

いただけるんですね？」

宰相 「ええ、かまいません。どうせこの国では貴族なんかありません・・・というか、周りの土地をもらっても開拓もできないような土地ですからね。魔獣もですし・・・ここを開拓できたのが奇跡みたいなもんですよ」

ミノル 「そういえばこの国はどのように建国されたんですか？ こんな奥地じゃさぞ大変だったと思うのですが」

宰相 「ざつと800年くらい前ですかね。初代アルマガルド公がいろんな種族のはぐれ者を連れてこのちに国を作ったのだと言われております。何でもたいそう優秀な魔法使いを連れいていたとか」

ミノル 「魔法使い？ 魔術師では無く？」

宰相 「ええ、なんでも一目見るだけで魔獣を絶命させ、攻撃を一切受け付けない力を持っていたらしく、その様から『魔法使い』と」

ミノル 「（ガラテアさん・・・か？）それはすごいですね。・・・とそろそろこれくらいにして、いつごろやりますか」

宰相 「今からでもいけますよ。いまあの豚は部屋にいます。近衛に言えば、即座に殺せるでしょう」

ミノル 「俺たち必要ないんじゃない？」

宰相 「そのあとに必要なのですよ」

ミノル 「それじゃあ、まあ。やっちゃってくだ
さい」

宰相 「ええ。伝令！ ようやく作戦実行だ
！」

伝令 「ようやくですね！」

1時間後

兵士A 「宰相！ 城の掃除が終わりました！」

宰相 「ご苦労。意外にしぶとかったな」

兵士A 「夜道に散歩していたようで・・・庭で
発見しました」

宰相 「そうか、他に特に報告するようなこと
が無ければ下がって良い」

兵士A

「では、失礼します！」

宰相
すね」

「これで、あとのことは任せて良いので

ミノル

「ええ。かまいません。人事は大幅に変わりますし、いろいろなことが今までと変わってはじめは混乱するでしょうけど。まあ、国名は面倒なんでこのままで良いですかね」

宰相

「そうですね．．．まあ、もはやわたしには関係のないことです。戴冠式等はいつ頃．．．？」

ミノル

「ああ．．．そんなのがあったな．．．まあ、いいや。ある程度待ちの環境を整えてからになると思う。ところで宰相？　あなたはこれからどうするんです？」

宰相

「このまま、細々と実家でもつこうと思つてますが．．．」

ミノル

「それだったら、このまま残つてちよつと財務副大臣や法務副大臣やつてみないか？　この国のことが分かつてるやつがいないとやりづらいなよな」

宰相

「もし、そのようにしていただけるならばありがたいです。そういえばまだ名前を聞いておりませんでしたな。わたしはポール・マクスウェルといいます」

ミノル

「ああ。僕はミノル。ミノル・オトヤだ」

ポール

「では、これから精一杯つとめさせていた

だきます。殿下」

ミノル 「僕、そんながらじゃないんだけど・・・」

ポール 「一国を治める者がそのような態度でどうするのです。なんなら王になりますか？ 皇帝というのも」

ミノル 「いや、いいよ。まあ、仕方ないか・・・」

明日人事は発表すると思うよ」

ポール 「楽しみにしておりますよ」

革命だ！！ とか派手じゃ無かったなあ・・・（後書き）

やっと内政には入れます。もしよければ感想とかいただけると作者のモチベーションがアップします

はあ、僕って絶対に言うのがらじゃ無いよなあ・・・

アルマガルド城 玉座の間

ミノル

「えーと、僕が今日からこの国を治める、

ミノル・オトヤです」

ゴモリー

「もっとしっかりしなさいよ・・・」

武官・文官

「『『『ざわ・・・ざわ・・・』』』」

ミノル

「人事を大幅に変更したり、いろいろこれ

までと違って混乱すると思うけど、確実によくなると思う。まず、重要な役職から発表する。宰相 マルティナ・ティアマテイト・ワ
ルプルギス」

ミノル

「次に・・・財務大臣 スフィンクス。法

務大臣 ストラス。労働大臣 ヘカトンケイル。外務大臣 ロノウ
エ。経済産業大臣カーリー。防衛大臣サブノック」

ミノル

「また、新に魔術開発局、医務局、人材開

発局、諜報局の設立。魔術開発局局长フェネクス。医務局局长ウロ
ボロス。人材開発局局长クローセル。諜報局局长ダンダリオン」

ミノル

「それと、大臣職の補佐官として、ポール・

マクスウェル。それと公爵首席補佐官ゴモリー。以上が主要人事で
す。各部の人事については各大臣、及び局長から詳しくあると思い
ます」

ミノル 「それから、毎朝の朝会の廃止。報告などは月末にまとめて行うものとする。この時間はこれからも忙しくなるだろうし、勤務時間とする。先ほど発表されたもの以外は解散」

ミノル 「やっぱり、僕こんながらじゃない……
・疲れた」

ゴモリー 「お疲れ、と言いたいところだけど、全然威厳のかけらも感じられなかったわ」

クローセル 「もう少し、威厳をもたれてもらわないといけません」

ミノル 「ああ、もう。うるさいな。まあいいや。
さっそく仕事があるよ。まずクローセル」

クローセル 「はい」

ミノル 「魔界中から、優秀な人材を集めて。できれば潜在能力が高い子供と優秀な技術者、各分野に秀でていて、教育者にふさわしい人格者を優先的に。教育機関だって立てなきゃいけないけど、人材は必要だし」

クローセル 「分かりました。金の方は？」

ミノル 「いくらでも。人数はできるだけ多く。可能な限り。それとこれが終わってからで良いから、国内の鉱脈の発見も頼む。たぶん勘だけど魔水晶の鉱脈があるはず。主に森の地下に」

クローセル 「分かりました。必ずやお眼鏡にかなう者をそろえましょう」

ミノル 「サブノックは、軍の再編。全員総当たり戦と面接をして、階級は割り振って。その後訓練。鬼のように訓練して。だけど過労死させないように。ただし、魔術騎士と魔術師は別。こっちはフェネクス頼めるかな？」

サブノック 「任せてください」

フェネクス 「分かりましたよ」

ミノル 「フェネクスはそれと同時に、魔術部隊から魔術開発が優秀なものと魔術刻印を刻める人を引き抜いて。それと、設立したら学院の院長もよろしく」

フェネクス 「・・・老体をいたわってはくれませんかあ」

ミノル 「悪い冗談です。好きでそんな姿してるのは分かってるんですから。ウロボロス、お前は国の病氣の人を治療。それと学院ができたら、そちらでもいくつか教えてもらうと思う。それとストラス、法律の大幅な改正を。おもに平等じゃ無い物を撤廃して」

ウロボロス 「任せてくださあ」

ストラス 「ふおっふおっふお。どうやらミノルは老体なほどきつい仕事を与えるようです」

ミノル 「ちょうど良い具合に割り振ってるだけです。ヘカトンケイル、お前は農業技術を教えることと、それから労働者を集めて。ある程度時が来たら、森を切り開いて道を作る」

ヘカトンケイル 「まじっすか。あの森切り開くんならちよっと鍛えないといけませんぜ」

ミノル 「それなら、サブノックと合同でして鍛えてもらって。スフィンクス、おまえは一応財務大臣だけど、ほとんどやることは無くなるから、そのうち別の仕事を回す。それとストラスにも言うけど、税率は0にして」

ポール 「な、無理ですよ。税率0でどうやって費用を算出するんです」

ミノル 「こうやってです。『複製』……これだけ白金貨があれば問題ないでしょう」

ポール 「な……！ ええ、どうやら必要ないようです」

ミノル 「まあ、これで何時迄もというわけにはいかないから、そのうち魔水晶を特産品として交易するよ。そういえばこの国これまで交易とかあったの？ どうやって必要なものを？」

ポール 「チューブ商会の者が、魔界から。実際に

は我々の支援でもありましたか・・・」

ミノル 「チューブ商会・・・キズキのところだな。当然必要なものはそっちからもらえると、あとはロノウエはまだしばらく待機。カーリー、市場調査と産業のレベルを確認して、大幅に技術革新を起こす」

ロノウエ 「かしこまりました」

カーリー 「わかったー」

ミノル 「最後にダンダリオン、間諜を徹底的に洗い出せ。洗脳して逆スパイにしても良い」

ダンダリオン 「わかった・・・」

ミノル 「マルティナとゴモリーは・・・僕の手伝い？ かな。ほとんど仕事は大臣に割り振るつもりだけど」

ゴモリー 「鬼ね」

マルティナ 「鬼よ」

ミノル 「別に良いだろう。さあ、忙しくなるぞ。みんな仕事にかかれ。その前に人事はちゃんと話し合ってる」

ミノル 「さて、僕はこれから国境にかべを立ててこようと思う」

ゴモリー 「かべ・・・ですか」

ミノル 「そう。このままじゃいつ攻め込まれてるかわからない。国境から遠いからね。ついでに結界もかけるつもりだけ」

ゴモリー 「それじゃあ、わたしは山より内側の盆地のところにかべを作るときます」

マルティナ 「わたしは、これから来る人たちの分の？と、学院と各施設の場所でも下見してくるわ」

ミノル 「よし、それじゃあ、早速」

ゴモリー 「ええ」

マルティナ 「分かったわ」

内政チート過ぎるなあ。性格以外はぴったりかも

アルマガルド公国 死者の山 国境側――

ミノル

「ほんとに魔力濃度が薄いな。馬鹿みたいに燃費の悪い機竜が飛べないわけだ。うし、ここで良いだろ。『複製』」

ミノル

「『改変』・・・規模はひとまずぐるっと囲うくらいで良いな。材質はヒヒイロカネと。あとは光学迷彩、と迷走、対物・対魔結界あたりのルーンかな。魔力は周りの死体や植物からで良いか」

ミノル

「さて、一瞬だったな。ゴモリーの方を見てくるか」

アルマガルド公国 死者の山 内陸側――

ゴモリー

「さてさて、わたしはミノルと違って複製もできないいいしなあ。精霊たち、使者の山の内側にヒヒイロカネで壁を作ってちょうだい。それからコレコレというルーンを刻んで。そうよ」

ミノル

「おお。もう終わってたかい」

ゴモリー 「わたしはやってないわよ。ちょっと金属の精霊と土の精霊に頼んでやってもらっただけ」

ミノル 「完全人任せか、うらやましい」

ゴモリー 「神様の特権なのよ。さて、そしてあとは施設も建てちゃいましょうか。マルティナが下見してると言ってたし」

ミノル 「そうだな」

【アルマガルド公国】
人口 250132人

国土面積 10403平方キロメートル
戦力 一般兵50024人 騎兵隊30316騎 魔術騎士250
52人 魔術師10302人
交易品 なし
軍事兵器 なし
食料自給率 28%
国庫残高 ∞
税率 0%
固有技術 なし
施設 学院 魔術研究所
都市 首都アルマガルド

【内政2日目】

アルマガルド公国 執務室

ミノル 「なんでこの国は軍人がこんなに多いんだ・
・・？」

ポール 「反乱軍に加わる者も多く、また、軍以外
では稼ぐことも難しいですからね。自然とみんな軍に所属するわけ
です」

ミノル 「なるほどなあ。しかしおかげで食料自給
率も低いし、よくこんだけで餓死しなかったな」

ロノウエ 「・・・ミノル様、お客様です。チューブ商
会のものだと」

ミノル 「ああ、通して。玉座の間へ」

ロノウエ 「かしこまりました」

アルマガルド公国 玉座の間

ミノル 「あなたがチューブ商会の方が」

エヒム 「はい。エヒムと申します。この度はおめで
とうございます、ミノル様。会長からお話は伺っております」

ミノル 「僕はこんながらじゃないけどね。食料なん
かも僕が複製したっていいんだけど、さすがにそれはね・・・食料
とかは、これまで通りで。それと、相談なんだが」

エヒム 「なんでございましょう」

ミノル 「こっちに支店を出してくれないかい？」

エヒム 「支店、でございますか。しかし、ここは立
地も厳しくわたしのようには転位魔術の使えるものでなければ厳しい
かと」

ミノル 「その点は大丈夫。北ルートを開拓しようと思っ
ていてね。山にトンネルを開ける。できれば運搬用の交通手段
を通せればとも思っけど。それに幸い北には魔界南部でも有数の交
易都市メンデルもあるしね」

エヒム 「なるほど。でしたら、そのルートが開通次第支店を置くという形で」

ミノル 「勝手に決めていいのかい？」

エヒム 「わたしは、南部地方で全権を任されており
ます故」

ミノル 「ならいいけど。それじゃあ、近々開通させるよ。今週中に北部メンデル間ルートを開けておくから来週くらいに実際に来てみて」

エヒム 「ら、来週でございますか」

ミノル 「何か問題あった？」

エヒム 「いえ、とんでもございません。では、来週に」

ミノル 「うん」

クローセル 「ミノル様。失礼します」

ミノル 「クローセルか。思ったより早かったね。人材は集まった？」

クローセル 「ドワーフの技術者20人、エルフのルーン職人15人、人族の工学者10人。どれも一級の腕です。また、戦略級魔術師、中でも魔術開発者としても優秀な者を5人。それから学院の教師陣として、各系統の一流魔術師を10人程度ずつ。鍛冶、細工、服飾、などの生産系の技術者を5人程度ずつ。剣術、槍術、格闘術、総合戦闘など武術に秀でた者を3人ずつ」

ミノル 「よくそんなに集めたね・・・」

クローセル 「いえ、さらに学院の生徒として将来有望そうな青少年少女を10000人程度。年齢は10歳前後から18歳程度までです。しっかりと学べば、皆一流になるでしょう」

ミノル 「分かった。雇った人材はいつごろつこつちに？」

クローセル 「ひとまず生徒は来月中までにと言っており、教師や、技術者達は今月中にでも」

ミノル 「そうか。それじゃあ、まず、道を作るかな。昨日施設は作ったし」

クローセル 「ああ。郊外に新しくできていた建物ですか。宮殿から華やかさを無くしたような建物でしたが・・・あとは巧妙に隠していたようでしたが、『塔』でしたか」

ミノル 「宮殿は学院と？で、塔は魔術研究所だよ。まあ、魔術研究とは、言っても魔術を利用した新しい技術とか、改良とかをしてもらうつもりで、魔術を研究するわけじゃ無いけどね。開発はさせるけど」

クローセル 「おや、魔術自体の研究はしないので？」

ミノル 「僕の前じゃ研究なんて意味をなさない」

クローセル 「それもそうですね。それと、ミノル様の言っていたとおり魔水晶の鉱脈がありました。というより、あの山はほとんど魔水晶のようです。それもかなり純度の高い。天然であればとは永い間生きてきて初めて見ます」

ミノル 「なんだって！早速採掘場を作らないと。人は？」

クローセル 「集めてはありますが、来るのは今月中です」

ミノル 「しかし、あの山ほぼ全部とは・・・魔界に売りつければ、僕的能力が無くても良さそうだ。他に資源は？」

クローセル 「ここら辺は宝の山です。地下にはミスリルの鉱脈がありました。1000年分くらいです。さらには山の清水は濃度

の高い魔水、あと、これはゴモリー様が壁を作る時についてに精霊がやってしまったと言っていました。がヒイロカネの鉱脈もあります」

ミノル 「じつは全部ゴモリーが精霊にやらせたんじゃないのか？」

クローセル 「さあ、どうでしょう。それは本人しか知らぬところですよ」

ミノル 「まあ、いいさ。さて、僕はこれからトンネルと道を作りに行く。おまえはフェネクスやサブノックに人材のことを伝えて」

クローセル 「かしこまりました」

アルマガルド公国 北部壁

ミノル 「さて、まずは『改変』 もんを作つとかないな。それで『改変』トンネルを開けて『改変』道を作つて『改変』街灯をつける。さて、いったい何年かかる工事だったんだろう」

ミノル 「一瞬で終わる仕事ほどつまらないものもないや」

ミノル 「あと採掘所と採取所作って・・・」

【アルマガルド公国】

人口	250132人
国土面積	10403平方キロメートル
戦力 一般兵	50021人
騎兵隊	30312騎
魔術騎士	250
51人 魔術師	10302人
交易品	魔水晶、ミスリル、魔水、ヒヒイロカネ
軍事兵器	なし
食料自給率	32%
国庫残高	∞
税率	0%
固有技術	なし
施設	学院 魔術研究所
都市	首都アルマガルド

交易って儲かるなあ・・・

【内政9日目】

アルマガルド公国 玉座の間

エヒム 「まさか本当に街道を作られるとは・・・
ええ。我々としても喜んで支店を出させていただきます。それに
ここ1週間でだいぶ開墾も進み、鉱脈も発見されたご様子。郊外の
建物は学院ですか？ 魔都のものを少し小さくしたもののようです
が」

ミノル 「ああ。あれは近々魔界中から才能のある
ものを集めて育てる為の学院だ。最も魔都のものと違い学費は取ら
ぬがな。働いて返せ、と言うわけだ」

エヒム 「ええ。ミノル様も多少は威厳が出てきた
というものです」

ミノル 「やめてください。僕はそんながらじゃな
いですし・・・ゴホン。ところで1つ提案があるんです」

エヒム 「我々にとって魅力的なものなら」

ミノル 「もちろんです。交易品についてなのです
が」

エヒム 「鉱山から何かとれましたか？ 規模も大

きなものでしたし」

ミノル 「まだまだ人手が足りませんから、本格的にはまだ後からになります。……まず純度の高いミスリル、濃度の高い魔水、それと最高純度の天然魔水晶」

エヒム 「ほ、本当でございますか」

ミノル 「あ、いやあとヒヒロカネも」

エヒム 「是非とも受けさせていただきます。まさかそこまでの鉱脈が……どれくらいは分かりますか？」

ミノル 「山があるでしょう、あれのほとんどが魔水晶。魔水は山から流れる清水。ミスリルは地下でざっと1000年分くらい、ヒヒロカネは分からないけど」

エヒム 「……金の成る木があると言われる方がまだ現実味があります……分かりました。金額は自由に決めていただいてかまいません」

ミノル 「僕こういうものの金銭的価値がよくわからないのでそちらでお願いできますか」

エヒム 「1月あたりどれほど輸出を？」

ミノル 「今の市場バランスを崩さないよう、ごく少し。と考えています」

エヒム 「分かりました。我々としてもバランスが

崩れるのは避けたい。そうですね。それならば1月あたり1000万クオーク程度。これはヒイロカネを除いてです。ヒイロカネは本来数百年に1度出るかどうかと言うもの。どうしても必要になった場合だけ、としましょう。他は国内で使ってください」

ミノル 「分かりました。しかし1億クオークですか・・・1月で・・・ 傭兵時代でもせいぜい月に3000万クオークだったのに」

エヒム 「3000万クオークもあれば一生働かずとも生きていきますよ・・・？」

ミノル 「レジエンダリー、て働かなくても生きていけるからね。その給金だけで」

エヒム 「そういえばミノル様はそうでしたな。確かに金銭的価値は常識外れそうだ・・・」

ミノル 「まあ、そしたらよろしくね。たぶん早くても来月か再来月だと思うけど」

エヒム 「それまでに支店を準備しましょう。できるようになればぜひ支店へ」

ミノル 「うん。そうする」

エヒム 「それでは今回はこのあたりで失礼させていただきます」

【アルマガルド公国】

人口 250138人

国土面積 10403平方キロメートル

戦力 一般兵50029人 騎兵隊30311騎 魔術騎士25

050人 魔術師10300人

交易品 魔水晶、ミスリル、魔水、（ヒヒイロカネ）

軍事兵器 なし

食料自給率 35%

国庫残高 ∞

税率 0%

固有技術 なし

施設 学院 魔術研究所

都市 首都アルマガルド

【内政31日目】

アルマガルド公国 執務室

ミノル 「やっとマシになってきたなあ。人材も集まって、法律もだいぶ改正されたし。兵士を屯田兵にしていぶ農地も増えたしな」

ゴモリー 「そうですね。再来月からは生徒達も来ます。魔術開発などもこれから本格的に行えるでしょう」

ミノル 「そうだね。ああ、それとゴモリー。僕はこれから報告を聞かないといけないし、その間チューブ商会の支店に行って交易の件を話してて。エヒムさん南部の本店をこっちに移したそうだけど」

ゴモリー 「分かりました」

ミノル 「よろしく」

ミノル

「じゃあ、各々報告を」

マルティナ 「じゃあ、まず全体のことについて現在の我が国の実態ですが、

人口 250341人

フェネクスの引き抜きや訓練について行けなかったものが多少降りますが屯田兵も含め

戦力 一般兵50029人 騎

兵隊30311騎 魔術騎士25050人 魔術師10300人

また文官の再編が終了しました。

また、この国では自営業がよほど厳しかったようで、軍に所属していないものをほぼ全員文官でした」

ミノル

「国民全員宮殿勤めか、すげえ国だな」

スフィックス 「税率は0% 赤字なし。財政は安定しています。特に報告することはありません」

ストラス 「ひとまず、法律の大幅な改正が終わったの。特に大きいのは満14歳のおなごの王への献上義務を撤廃したことじゃな。その他細かいところは報告書を」

ミノル 「あの下種豚はそんな酷いことまで・・・」

フェネクス 「現在被害に遭った子供は私たちが魔術と併用して精神療法を行っています。しかし、回復までには時間がかかるかと」

ミノル 「そうか・・・ご苦労。つぎはヘカトンケイル」

ヘカトンケイル「うっす。カーリーからもあると思うっすけど、耕地面積のおおはばに広げられたっす。また、非労働者の数も少なくなったし、あるていど治安もよくなったと思うっすね」

ロノウエ 「これといった報告はありません」

カーリー 「えーと、まずのうぎょうのおおはばこうりつかにせいこう？ それとすいでんでこめのせいさんをかいししました」 あと、さいくつはいつでもかいしできるよ」

サブノック 「昨日ようやく新しい階級に割り振れた。軍部も再編は完了だな。それと、かなり質は低かったがいくらか優秀なものが来ると、訓練も効率化でき、全体の質は上がったな。今のところ下の中、傭兵ランクで言えばDと言うところ。一番の実力者でC止まりだな」

フェネクス 「魔術開発局も職員はそろいましたし、いつで

も始められますよ」

ウロボロス 「ひとまず、城下町にいる奴らには万能薬を配つといた。それ以外は特にはないです」

クローセル 「成果は先日報告したとおりです。現在は雇用したもののさらなる育成を図っております」

ダンドリオン 「スパイ……とらえた……それから、各国に影も送つといた」

ミノル 「うーん、まあ、まだ食料とかは配給制なんだよね。僕としては街が殺風景だからもつと商店とかを増やしたいけど……今のところチューブ商店の南部本店兼デパートとドワーフたちの工房があるだけだし」

ヘカトンケイル 「どんな店があれば良いか聞いて、それを国営で店を出すってのはどうっすか」

ミノル 「そうだね。できれば学生達が来る来月までが良いけど。宮殿で仕事のない日もおおいだろうしね。あるとしたらレストランとかかな？」

マルティナ 「そうですね。食材とかもチューブ商会から手に入りますし」

ミノル 「じゃあ、それでいこう。軍部はまだ質がたりないな。楽に制圧すること、占領後の統治を考えるとランクB前後ほしい。それから、倫理もたたき込まないと」

サブノック 「倫理については、訓練で疲れ、倒れたものに催眠教育を行っている。性格はだいぶマシになったな。幻術でテストしてみてるが、最近はある程度マシだ」

ミノル 「そのまま続けてくれ。魔術開発局の方には、魔水晶から魔力を抽出して利用できる魔力機関と、ヒビロカネや、ミスリルを使った魔導武器の作成、改良をお願いしたい。軍部全員分用意できれば言う事無しだが」

フェネクス 「分かりました。できるだけやってみましょう。その他にも我々が研究したいものを研究しますが、良いですか？」

ミノル 「別にかまわないよ。ウロボロスは、来月からは学院で医療系科目全部受け持つってもらうから、よろしく」

ウロボロス 「人使いあらいですよ・・・」

ミノル 「クローセルもそのままお願い。もしかしたら、学院で教師してもらうかもしれないけど」

クローセル 「分かりました」

ミノル 「ダンダリオンは、そのままカウントースパイと、情報収集」

ダンダリオン 「まかせて・・・」

ミノル 「よし、じゃあ今日は解散。次はまた来月末に」

ミノル 「ふう」

ゴモリー 「ただいま戻りました。例の件は問題ありません」

ミノル 「分かった。ご苦労。さて、いろいろやりた
いことはあるんだけど・・・」

【アルマガルド公国】

人口 250341人

国土面積 10403平方キロメートル

戦力 一般兵50029人 騎兵隊30311騎 魔術騎士25

050人 魔術師10300人

交易品 魔水晶、ミスリル、魔水、（ヒヒイロカネ）

軍事兵器	なし
食料自給率	69%
国庫残高	∞
税率	0%
固有技術	なし
施設	学院 魔術研究所
都市	首都アルマガルド

交易って儲かるなあ・・・（後書き）

クオークは魔界共通の通貨です。1クオーク 10円 って感じですが月収3億円wwww どの大金持ちなんでしょう。しかし、ミノルってお金いらないんですね。ほしいのがあればお金複製するより、それ自体複製した方が早いですし

やっぱ入学式と言えば長ったらしいあいさつだね〜

【内政65日目】

アルマガルド公国 学院 講堂

ミノル

「まず、入学おめでとう。君たちが、各々持っているすばらしい才能を生かし、アルマガルド公国の発展のための礎になってくれると信じている。隣に座っているのは、人魔族だけでなく、鬼族、竜族、妖魔、獣人族、妖精もいると思う。ここは種族による差別は無い。そしてさせない。隣にいるものは今日から君たちと友に学院で学ぶ仲間だ。よい友人関係を築いてほしい。さて、この学院の教育についてだが、まず君たちには総合学科で学んでもらうことになる。そしてここで単位を取ることができればそれぞれ学科を選んでもらう。ただし、学科が違うからと言って講義が聴けなくなるわけじゃ無い。試験の内容や、必須科目が変わるだけで、講義の時間がかぶってなければいくらでもとってかまわない。残りの説明は学院長からあると思う。最後に、君たちがよい学院生活を過ごせることを願っている」

フェネクス 「では、学院長のわたしから説明を。先ほどあったように、あなた方には総合的な能力、これは武術、魔術だけじゃ無くコミュニケーション能力や、理解力、応用力など様々な能力のことです。これらを学び、伸ばしてもらった上で、単位を取れば学科に応じた講義を受けてもらいます。ただし、総合学科でも選択の講義はありますから、興味があるものをとっておくと良いでしょう。次に学科ですが、まず魔術科、魔工技師科、魔法研究科、騎士科、傭兵科、諜報科、暗殺科、護身科、医療科、薬学科、鍛冶科、服飾科、商業科、農業科、水産業科、経済学科、・・・その他たく

さん学科があります。この学科の多さは魔界一です。皆さんはこの中から一つ選び、在籍してもらいます。学科毎に単位を取るための試験が用意されています。これは担当の教員に言えばいつでも受けることができます。合格すればその学科は卒業です。他の学科に移るもよし、その技能を生かして職に就くもよし、学院に残って教員をしつつ研究に励むのも良いでしょう。これで簡単な学科の説明を終わります」

フェネクス 「これから、皆さんは簡単な筆記試験と実技試験を受けてもらいます。この結果を受けて私たちは実力に応じたクラス分けをします。また、結果を返す際に、能力をグラフ化したものや、能力に合った学科などを簡単に書いたものをつけた『学徒賞』を渡します。これは身分証明書にもなりますし、この学院での決まりや、社会に出て役に立つ知識、周辺の地図などを乗せてあります。受け取ったらず必ず目を通しておくようにしてください」

・
・
・

アルマガルド公国 執務室

ミノル 「やっぱり、入学式とか言うのは暇だよな

」 くだらだたと長い話もあるし」

ゴモリー 「仕方の無いことよ。あきらめて。それから、

これがチューブ商会との契約書。内容はこの前の通りよ。こっちは水田での米の成長の報告と、街道整備の報告、軍の戦力状況の報告、それから、魔導武器の試作の完成の報告と、例の魔力機関の完成の報告をまとめた報告書」

ミノル

「もう完成したのか？」

ゴモリー

「まあ、理論自体は元からあったけど、なかなか素材が無かったようね。今は術式の改良で小型化を図ってるらしいわ。それと、従来の外燃魔力機関との併用のための設計。で、こっちは各ギルドの支部の設置の申請」

ミノル

「全部許可しといて。そうだなあ、魔導艦は大空洞都市の外だと厳しいかな？」

ゴモリー

「確かにあれば、大空洞都市の中だけの技術ですけど、魔界は魔導機士が多少出てきた程度ですし。まだまだ、あれも大空洞都市が提供した、第一世代の技術。大空洞都市では第四世代が今の主流ですし、いざとなればこっちの資源なら魔人にした方が強力かと」

ミノル

「まあ、確かに魔人は強力だけど、やり方がなあ」

ゴモリー

「フェネクスがいますから、死ぬことは無いでしょう」

マルティナ

「私がいなくて面白そうな話してるわね」

ミノル

「職員会議は終わった？」

マルティナ 「終わってなければここにはいないわよ。それより魔人てなにかしら」

ミノル 「うーん、研究の仕方が非人道的だからあ

まり好きじゃ無いんだけど、魔水晶があるでしょ、それを溶かして液状化させて、オリハルコンかヒイロカネを溶かして液状化させたものと混ぜる。そしたら特殊な術式で溶けた水晶だけ抽出するんだ。そうすると液化したオリハルコンに魔力が残る。これとまた液化させた魔水晶を混ぜて、また水晶だけ抽出する。こうすると高密度の魔力がこもったオリハルコン、あるいはヒイロカネができるんだ。で、オリハルコンやヒイロカネは、魔力を通すと状態が変わりにくくなって、魔力容量が最大になると完全に液体になるんだ、冷えても固体にならないの。これを生き物の血液中に注入する。そうするとその生き物はすさまじい魔力と、身体能力が手に入る。これが魔人」

マルティナ 「良いこと尽くめじゃない。なぜ非人道的なの？」

ミノル 「まずたいていの生物は注入した時点で死亡するんだよ。大量の魔力が体になじまないで拒絶反応が起こるんだ。だけど、これを注入すると、オリハルコンやヒイロカネの特殊な効果で持ち主の身体能力が強化される。この身体能力って自然治癒力とかも含まれるんだよ。そして、この能力の強さはこもってる魔力の2乗に比例する。最大まで入っていれば、体の老化は止まるし、滅多なことじゃ死ねない。だから注入されると長時間激痛が走る。そればかりじゃ無く、内臓がつぶれては再生を繰り返したり、血が噴き出したり、惨劇が繰り返されるんだ。そしてまあ生き残れるのは10人に1人くらいかな。他はたいてい、体に注入された液

化したヒビロカネやオリハルコンがつきるまで激痛に襲われて死ぬよ。で、これだけじゃ無く、これを研究する時に人体実験をするんだけど、これは奴隷を使って強制したんだよ何万人の奴隷が人体実験の犠牲になった」

マルティナ 「そう・・・ところでなぜあなたはそんな詳しいの？ そんなこと大空洞都市でもあまり知られていなさそうだけど？ あと魔導艦とかね？ もとの世界にあったわけじゃ無いようだし」

ミノル 「マルティナにあつてからもゴモリーとかのところに行つてね。ゴモリー達はどんなことが起こつてるのか分かるから、いろいろ知れるんだよ」

マルティナ 「ああ、だから時々いなかったのね。で、なぜフェネクスがいると死なないの？」

ゴモリー 「それはわたしから。彼女の範囲治癒魔法によるものよ。死んでいなければ即座に完治し、しかもかかつてる間は痛覚は麻痺される。彼女はかつてこの魔法で、不死身の軍団と呼ばれたほどよ」

マルティナ 「固有種達が戦つてるところとか見たこと無いわ。それも軍団を率いてなんて」

ゴモリー 「もうずいぶんと前のことよ。固有種達も、まだあなたたちと遊ぶのに飽きてない時代。戦争も多かったしね」

マルティナ 「想像できない・・・で、まあ魔人ができるだけ使いたくない理由は分かったわ。魔導艦は？ やっぱり、進みす

ぎた技術が急に世に出るのは心配？」

ミノル 「そうだね。まあ、魔導艦はガラテア達とも話しておけばいいや。そして、どうせだから魔導機士、それも第5世代を作ろう。僕たちで新世代の魔導機士を作ろうじゃ無いか。『念話』おいクローセル、大空洞都市に行つてガラテアさんから、技術士引つこ抜く許可と第5世代の開発の許可、ついでに魔導艦が良いかどうか確認してきて。許可とれたら技術庁とかじゃ無くて才能がありそうな新人と、知識のある熟練を雇つてきて。説得は口ノウエ連れて行つて良い」

クローセル 「かしこまりました。では早速」

ミノル 「さて、クローセルを向かわせたし。これでいいだろ。後は魔人についてだけ」

マルティナ 「具体的に魔人てどの位強いのか？」

ミノル 「魔術適正自体は変わらないけど、全く使えなかったような系統の魔術も戦略級魔術師の5倍くらい使えるようになる。身体能力は傭兵のレジエンダークラスが10人集まつてようやく互角くらい。ただし、これは魔人は単純に身体能力だけで、魔術とか一切使わない、なおかつ素手で傭兵は、バリバリ最強装備で魔術もガンガン打つて互角」

マルティナ 「わたしより遙かに強いんじゃないや・・・？ といつか、わたしでもなれるのか？」

ミノル 「なれるよ。ちょっと準備に時間かかるけど・・・しかし、マルティナの強さの探究を相変わらずだね」

マルティナ 「もちろんよ。それで、ミノルや、ゴモリーはどれくらいの強さなの？ 魔人に比べて。わたしが助けた時より遙かに強いんでしょ？ ミノルも」

ミノル 「うゝん、基本マジで不死身だし、相手の魔法は全部解除できるし、身体能力なんて僕にとってどうでもいいからな。相性の問題で圧倒的に僕かな？ というか勇者はみんな能力がチート過ぎて相手にならないと思う。まあ、あえて言うならキズキ？ いろいろチートな宝具とか、例の機械人形達の強さが未知数だけど」

ゴモリー 「機械人形の方が強いですよ。それからわたしは相性とか関係なく、何人集まっても敵にならないくらいの強さです。精々蚊がちよっとうるさいなというレベルかと」

マルティナ 「次元が違うのに聞いたのが馬鹿だったわ」

ゴモリー 「いえいえ、普通なら気にせず踏み殺してる微生物とかだから、ずいぶんな進歩よ」

マルティナ 「もういい・・・あなたたちの話聞くと疲れるわ。それで、どの位注入するの？」

ミノル 「マルティナは強くなりたいんでしょ？ フェネクスがいれば基本的に死なないと思うし、量を普通より増やそうか。たくさんとれるし。1万倍くらい？」

マルティナ 「具体的にどれくらいよ、それ」

ミノル 「ざつと10リットルくらい？」

マルティナ 「血管が破裂するんじゃないの」

ミノル 「フェネクスの魔法なら、破裂してもすぐに回復するから問題なし」

マルティナ 「そうなの。じゃあ、よろしく。準備ができたから。わたしは学院の職員室か、隣の執務室で事務仕事してるから」

ミノル 「うん。まあ10日くらいかな？」

マルティナ 「フフ、楽しみだわ」

ゴモリー 「まあ、1万倍も入れるなんて実験はわたしも初めてだから、どうなるか知らないけど。もしかしたら、魔力で体に変質するかもよ」

マルティナ 「不安になること言わないで・・・」

魔人かねえ。しかし上には上がいるんだよ

アルマガルド公国 魔術研究所 実験室

ミノル 「んじゃ、マルティナ、その台に寝て」

マルティナ 「いいけど、って拘束するのね」

ミノル 「拒絶反応とかで、体が暴れるしね。まあ痛み無くてもそうなんじゃ無い？ 自分の体じゃなくなるみたいな感じ。それと、酷い魔力酔いによる不快感もあるだろうから」

マルティナ 「痛みが無いだけマシか」

フェネクス 「それじゃあ、魔法をかけますよ……『神化治癒・永続』」

ミノル 「さて、じゃあ注入しますかね。多量が多いががんばれ」

フェネクス 「言い忘れてましたけども、拒絶反応で即死しましたら、安楽死するだけでございますよ」

マルティナ 「なんで早く……うぐーじゅっつえりしえ y t r i y g j h」

ミノル 「やっぱ拒絶反応はでるんだな」

フェネクス
「いましょう」

「普通は激痛を伴いますから幾分かマシでござ

数時間後

ミノル

「あ、目覚ました？」

マルティナ
「いしそう・・・」

「うう、まあ、なんとか。自分の魔力で魔力酔

ミノル
「魔術発動は気をつけてね。灯りをとますだけで太陽レベルの灯り入らないから」

マルティナ
「身体能力も調整できるようにしないと・・・
ちよつと持っただけでカップが割れてしまうのは困るし・・・」

ミノル
「割れるならまだしも、粉みじんになった
えあ目も当てられない」

マルティナ 「要は、慣れね・・・ そういえばフェネクスは？」

ミノル 「自分の役目は終わったからとか行つて、戻つていった」

マルティナ 「そう。うーんどれくらい強くなったかいまいち実感わかないわね」

ミノル 「どうするのさ」

マルティナ 「戦つてみるとか？ たとえば、ミノルとか、ゴモリーとか」

ミノル 「あゝ、うん。ゴモリーとはやめた方が良いと思う。なんていうか、挫折するレベル」

マルティナ 「それを聞くとぜひ戦つてみたいわ。いつつもキセル吹かしてるような感じなのに」

ミノル 「侍女頭もクソ強いしね」

マルティナ 「侍女とかいたんだ」

ミノル 「いるんだよ、馬鹿みたいに強いのが」

マルティナ 「今から挑んでこようかしら、ゴモリーに」

ミノル 「じゃあ、ついでに結界の強度も調べるから、できれば結界よりも上空で」

マルティナ

「分かったわ。今すぐ行ってくる」

ミノル

「たぶん執務室にいるはず」

アルマガルド公国、上空

ゴモリー 「あとで、文句言っても知りませんよ。怪我したとか、チート過ぎでしょとか。まあやり過ぎないようにするわ。それとあなたの敗北条件だけど、あなたが結界よりも下に入ったら負けね」

マルティナ

「勝利条件は？」

ゴモリー 「絶対に無理だから言うだけ無駄だけど、そうね、一回でもわたしに触れるか、攻撃が届いたら良いわ」

マルティナ

「それじゃあ、早速。『雷嵐』・・・え」

ゴモリー

「いつとくけど、座天とか力天じゃ攻撃通らな

いわよ。まあ、今のはおこぼしで消滅程度だったけど」

マルティナ 「もう一度よ。『雷神』」

ゴモリー 「やれやれ・・・返しちゃって」

マルティナ 「・・・っ！『結界』 発動した魔術が消失する
だけじゃ無くて反射するとか・・・『霊槍 方天画戟』」

ゴモリー 「良い宝具だけど、まだ概念強度が低いかな？」

マルティナ 「方天画戟が止まった！？『術式無効』のはず
なのに」

ゴモリー 「そもそも術式じゃ無いしね」

マルティナ 「『魔砲』」

ゴモリー 「うつつとっし、魔弾ですね。『消えよ』」

マルティナ 「え！『魔砲』『魔砲』・・・なぜ発動しない」

ゴモリー 「ちよつと、魔力を集められないようにしまし
たから。魔術発動には大気中の外魔力も大切なのは知^{マナ}っているでし
よう」

マルティナ 「確かに自分の魔力が四散しないように支えの役
割をするけど・・・それがどうしたのよ！」

ゴモリー 「やっぱり、蚊程度の力でしたか。そろそろ終

わりにしますか。あれを送っていつて」

マルティナ 「うわ、なにをするの！ かをqえk w・・・」

ゴモリー 「自由落下は嫌いだったかしら。そこまでいいわよ。はい、これであなは結界よりも下。つまり負け」

マルティナ 「なによ、インチキよ。今の何！？ チート！？」

ゴモリー 「だから、文句言わないでって言ったじゃ無い」

——— 同時刻 アルマガルド公国 広場 ———

ミノル 「いきなり飛ばすなあ。まあ、結界は大丈夫そうだけど。雷の嵐とか」

ウロボロス 「ありや、まあ姐さんも姐さんだが、今なんで『雷撃』が跳ね返ったんですかい？ 魔術を使ったような反応もありませんでしたし」

ミノル 「ウロボロス、いたのか？ 他のみんなは」

ウロボロス 「みんな仕事です。俺は今授業は行ってますので、
んで、質問に答えてくださいや」

ミノル 「ああ、じゃあ、あれは座天の魔術だけど雷と
かの現象がそもそもどういふプロセスで発動するかわかる？」

ウロボロス 「いろいろ説はありますけど上空と地面の間、また
は上空の雷雲内に電位差が生じた場合の放電により起きるとされて
るんじゃないありませんでしたっけ」

ミノル 「それは、あくまでも科学的な説明だし、なぜ、
電位差が生じるのか、それを説明できたとして、なぜそうなるのか・
・と無限に疑問は続くのさ。だけどここは良い具合にそれを説明
するものがある」

ウロボロス 「なるほど、精霊ですか」

ミノル 「ご明察。まあ、精霊ってのは最近知ったけど、
そういうのを利用して魔術じゃ無くて直接自然現象を起こす技があ
ったってのは知ってた。で、ゴモリーは利用するなんてもんじゃ無
い。支配するんだ。自在に操れる。そして、精霊達も自分より行為
のゴモリーには危害を与えられない。もししようとすれば、さっき
の雷嵐みたいに消滅するし、ゴモリーが望めば術者に跳ね返る羽目
になる」

ウロボロス 「つまり自然のものでは太刀打ちできないと。と、
じゃあ今の方天画戟が止まったのも」

ミノル 「所詮金属も自然のもの。精霊が宿るんだ、当

然危害を加えられないから今みたいに止まる」

ウロボロス 「また始まったつすね。魔力砲ですか？・・・て、消えた。これもなんかタネがあるんですかい？」

ミノル 「じゃあ、魔力がどんなものであるか分かる？
どうやってできるのかとか」

ウロボロス 「どんなもの勝手言われれば、魔術の元になるくらいしか説明できませんぜ。どうやってかと言われれば生命エネルギーが変換されるものだとか」

ミノル 「そうだけど、じゃあ、どうやって生命エネルギーが魔力に変換される？」

ウロボロス 「それは、神のみぞ知るって感じですよ」

ミノル 「そうそう。で、ゴモリーはその神様なんだよ。答えは、ゴモリーが作った魔法陣で生命エネルギーを魔力に変換してる。魔法陣は世界規模の大きさ」

ウロボロス 「うげ、どこにそんな大きな魔法陣が」

ミノル 「地下らしいよ。で、なんで魔術が発動できないのかってのは、単純にゴモリーが生命エネルギーを操れるから。魔力はそれを変換したものでしょ。体に摂取されたものは若干変わるから無理らしいけど、大気中の外魔力^{マナ}は基本的に自由に操れえるらしい。そうすると、魔術を発動する時には自分の魔力だけで発動させようとすると、術式が四散して発動しない。普通は外魔力が四散しないように支えになってくれるからね。だから、外魔力をそこ

ら辺から消してやれば当然発動できなくなる。これがタネ明かし」

ウロボロス 「つまり、どんな攻撃も無駄ってことですかい」

ミノル 「そうそう。で、さっきも行ったように生命エネルギーを操れるんだけど、これがゴモリーの運命の女神たる所以なんだよ。別に過去・現在・未来が見れるからとかじゃ無くて」

ウロボロス 「え？ そうなんですかい」

ミノル 「うん。生命エネルギー手のはその人の運とか才能まで決められるらしくてね、生物に宿る時もゴモリーの魔法陣を通じて宿すらしいんだけど、このとき生命エネルギーを操れば、それこそ超天才も超大馬鹿も思いのまま。だから運命を決められるともいえる」

ウロボロス 「もし生まれ変わることがあれば、ぜひそうしてもraitaitaiですね」

ミノル 「もうすでに十分だと思うけど。あ、終わった」

ウロボロス 「さっきのも精霊ですか」

ミノル 「たぶん。基本精霊のすることに生物は逆らえないし」

ウロボロス 「そしてそれを操るゴモリーにも勝てないって訳ですね」

ミノル 「そういうこと」

ウロボロス

「俺、絶対ゴモリーの敵にならないようにします」

ミノル

「ははは。同感」

1個街潰しちゃった　つよい

【内政86日目】

アルマガルド公国　執務室

ミノル　「さて、今月も報告を」

スフィンクス　「いつも通り。万事問題ありません」

ストラス　「儂からもなしじゃの。裁判官の育成をもうすぐ終えられるという感じじゃろう」

ヘカトンケイル「農作業だけじゃ無く、徐々に自営業や商店で働く人も増えたっす」

ロノウエ　「表だって何か変わったことはありません」

カーリー　「やっと、いちばにもかつきができて、けいざいもまわるようになってきたよ」

サブノック　「ようやく、最終調整が終ったが、まあ防衛だけなら、魔導兵器は利用できないから良いが、責めるとなるとやはり魔導兵器が無いと厳しいだろう」

フェネクス　「先日の魔人かのデータがとれましたことと、依頼されていた内燃魔力機関と外燃魔力機関の併用魔力機関、まあ長いんで魔力機関と呼びますが、完成しました。ただ、魔導機士や、魔導艦の原動力にするに当たり、魔水晶の魔力ではたりませんでし

たから、他国でまねできないようにとも思い、先日の液化ヒヒロカネ、あれを魔力供給源としました。それから、魔導武器の方も完成し、すでに配布してあります」

ウロボロス 「特に大病になつてる人はいないですね。学院の生徒達も比較的優秀ですわ」

クローセル 「最近メンタルカウンセリングとかやっています。それから槍術も教える羽目になってしまいました」

ダンダリオン 「隣国のオルバインに不穏な動き・・・詳しくは分からないけどマルセイんに攻めるらしい」

ミノル 「オーケー。ご苦労。さて、それじゃあいよいよ第5世代魔導機士を作成してやろうじゃ無いか。ダンダリオンはそのまま諜報を。さて、第5世代・・・何を目指そう」

サブノック 「そもそも魔導機士は城などの強力な結界を無理矢理火力で粉碎しよう、と言う思想からきた兵器だ。現在は人型に魔導機士の大魔力を生かした、高火力魔導兵器を搭載していた。その巨体さもあり、前線でも敵を殲滅するためなどに使われるが最近はどこも魔導機士を持つからな、相手の魔導機士を足止めし、あわよくば倒すというのも役目に含まれる」

ミノル 「まあ、この国は今まで敵とかどうでもよかったみたいだから一台も無いけど・・・」

サブノック 「まあ、一台で、全部なぎ払えるのをつくるつもりだしな。それに山の内側まで進入されれば別だが、あの山一体は薄魔力地帯だから魔導兵器はこちらで用意した内燃魔力機関を使

わなければ動かない。外魔力が薄すぎて魔力の補給ができないからな。山の内側まで運べば良いかもしれないが、そもそも転位の魔法を使える魔術師は少ないし、自分とは違い巨大なものを狙った場所に転位させるのは難しいだろう。自力で運ぼうものならなおさらな」

ミノル

「で、結局どうする？」

サブノック

「制御面の問題から、基本的に人型だが、ヒヒイロカネなどをふんだんに使い、より強力な魔導兵器を持たせること、あるいは、ほとんど人型から抜けてしまうのも良いかもな」

ミノル

「前者だといまいちインパクトに欠けるんだよね。そうだね、思い切って人型から抜けよう。どうせ、魔導機士の操者は新しく教育するから問題ないだろ」

サブノック

「ええ、そうですが」

ミノル

「質問なんだけど、普通のしるとかの結果って一力所破れたら、全部崩れる一般的な結界と変わらないの？」

サブノック

「そのはずですが・・・その言い方だと、この国にかけてあるのは違うんですね」

ミノル

「うん。小さい結界をいくつも連結させてある。それに、魔導機士に搭載するのもそれにするつもりだし。そうだなあ、液化ヒヒイロカネを利用して半固体状の正八面体にして自由に体が変形するのは。体は浮遊」

サブノック

「つまり・・・？」

ミノル 「ええと、だから。体を自由に変形させられるってこと。伸ばしたり、縮めたり。後はそれらの中に魔導兵器を隠してるとか。まあ、登場石は休憩にでもして、入れないといけないけど、これも一力所にまとめられれば、急所を自由に動かせるみたいにして」

サブノック 「ああ、だいたい把握しました。ようは自在に変形できる半液化ヒイロカネの装甲の中に魔導兵器とか、搭乗席を入れて、近接攻撃はヒイロカネで刺突とかになるんですか。まあ、近接と言っても有効射程も広そうだし。しかし問題は制御ですね。全く新しい術式にしないといけませんし、連動させる部分がありませんから。まあ、移動関係は空中に浮けば良いので能天、力天系の魔術でどうにかなる。まあ、最悪ミノル専用機って感じで作るか」

ミノル 「いいよ。それなら、光学迷彩と拡張の魔術かけるようにしよう」

サブノック 「はあ。まあ、いい。で、他のはどうする？」

ミノル 「うーん、ひとまず、技術者育成もかねて、第4世代のやつをヒイロカネベースで量産。当然新型魔力機関で」

サブノック 「了解。何台かできたら軍でも訓練させる。歩兵から少し魔術が使えるやつを引っこ抜くんぞな」

ミノル 「それと、一応これを利用した超高度まで上げれる魔導艦を作って。超高空なら魔術の類いは届かないだろうし」

サブノック 「まあ、成層圏界面まで上がれば、急激に外魔力が薄くなるからな。普通の魔術なら四散するだろう。まあ、そうだな。作っておくにこしたことは無い」

ミノル 「ついでに巨大要塞化しといて」

サブノック 「・・・善処する」

【アルマガルド公国】

人口 250343人

国土面積 10403平方キロメートル

戦力 一般兵50020人 騎兵隊30311騎 魔術騎士25

050人 魔術師10300人 魔導機士操者9人

交易品 魔水晶、ミスリル、魔水、（ヒヒイロカネ）

軍事兵器 第5世代魔導機士？ 第4世代魔導機士？ 新型魔導要塞？

食料自給率 98%

国庫残高 ∞

税率 0%

固有技術 新型魔力機関

施設 学院 魔術研究所

都市 首都アルマガルド

【内政184日目】

オルバイン王国 玉座の間

伝令 「陛下！ ファウンゼンが敵の手に堕ちました」

オルバイン王 「なんだと！ あそこの守りは完璧だったはずだ！ 魔導機士までいたのだぞ。どこの国からの攻撃だ！」

伝令 「茨を巻いた黄金の杖の旗を確認しました」

宰相 「馬鹿な・・・ アルマガルド・・・
？ あの山を越えてきたというのか！ なぜ今まで発見できなかったのだ！ 見間違いでは無いのか！？」

伝令 「突如、空から巨大な要塞が現れ、3万ほどの大軍と我々のものより遙かに強力な魔導機士が降り立ち、そのまま結界を突き破って侵入、兵のほとんどは混乱のまま捕まりました」

オルバイン王 「信じられん・・・要塞は空など飛ばんのだ！
どういうことだ、新手の魔導兵器か・・・それにアルマガルド・・・」

ミノル 「あー、あー こちらはアルマガルド公国
公爵ミノル・オトヤだ。こちらから念話を使い、オルバイン王国全
土に話しかけている」

オルバイン王 「な・・・！」

ミノル 「御前達に選択肢は無い。ファウンゼンは
堕ちた。そして、オルバイン王よ、空飛ぶ要塞のことも聞いている
だろう。御前達の技術よりも我々は遙かに上だ。おとなしく降伏せ
よ」

オルバイン王 「なめるな・・・！ 小僧。我々が降伏何ぞする
ものか」

ミノル 「そうですか・・・残念です。しかし試運
転にはちょうど良い」

ミノル 「念話による説得は失敗か・・・ 仕方ない。首都を滅ぼしておけば後から降伏させるのが楽だろう。さて、あれで出撃する」

ゴモリー 「行つてらっしゃい。この街は灰になる？」

ミノル 「さあ。どうだろうね」

トリルハイム、メインハンガー

技術士 A 「ミノル様いつでも出撃できますぞ」

ミノル 「ありがとう。ようやく、これを試せるよ。新型魔導機士、カオス。ハッチを開けて、出撃する！」

技術士 B 「あいよ！ 暴れてきてくんなあ！」

オルバイン王国 上空

ミノル 「さて、光学迷彩をかけてるし、完全遮音も完璧。果たして気づいたら塵になってるのかな？ さて、一撃で決めてやるよ。『重力操作 超重力』」

オルバイン王国

宮廷魔術師 「陛下！ 結界に圧力が！ このままでは持ちませぬ、お逃げください」

オルバイン王 「ええい、どうした」

兵士 「屋根が崩れるぞ！ う、うwだおdfっk」

民A 「た、たすけあfんlk」

民B 「あああああ！！ひひひひい！」

ゴモリー

「街1つ文字通り潰すなんてえげつない・・・

まあ、貴重なデータは手に入ったから良いわ。けど、全然兵器のチエックにならなかったわね。今度ガラテア達のと模擬戦が必要かしら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048u/>

神様、理不尽です。日常を返してください。

2011年8月13日16時07分発行